

ヨハネの福音書(11)

第3のしるし

ヨハ5:1~18

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ①公生涯への序曲(1:19~51)
 - ②初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - ⑥2度目のエルサレム訪問(5:1~47)

2. 注目すべき点

- (1) 1~4章は、イエスの奉仕を外側から描写している。
- (2) 5~10章は、イエスの内面を描写している。
- (3) 1~4章は、ユダヤ、サマリア、ガリラヤでの個人に対する奉仕の記録。
- (4) 5~10章は、パリサイ人たちとの論争の記録。
- (5) 第1と第2のしるしは、個人に対するものである。
- (6) 第3と第4のしるしは、公の場で行われるものである。
- (7) 5~10章で、信仰と不信仰の亀裂が深まる。

3. アウトライン: 2度目のエルサレム訪問

- (1) 第3のしるし(5:1~9)
- (2) パリサイ人たちの敵意(5:10~18)
- (3) 父と子は同等(5:19~29)
- (4) 父の証言(5:30~47)

4. 結論

- (1) 祭りの名前が出てくる箇所
- (2) 5:1の祭り
- (3) 5章の病人と9章の盲人の対比

2度目のエルサレム訪問について学ぶ。

I. 第3のしるし(5:1~9)

1. 1節

Joh 5:1 その後、ユダヤ人の祭りがあって、イエスはエルサレムに上られた。

- (1) イエスは、祭りを祝うためにエルサレムに上られた。
 - ①ヨハネは、どの祭りであるかを明確にしていない。
 - ②ここでのイエスの奇跡と教えは、特定の祭りと関係したものではない。
 - ③ヨハネは、イエスがエルサレムに戻ったという情報だけを伝えている。

2. 2節

Joh 5:2 エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があり、五つの回廊がついていた。

- (1) 「羊の門」
 - ①エルサレムの北東にある門（現在のライオン門）
 - ②この門から、いけにえの羊を運び入れたので、この名が付いた。
 - ③ヨハネは、「歴史的現在形」を用いている。
 - ④ヨハネがこれを書いたときには、エルサレムは崩壊していた。
- (2) 「ベテスダと呼ばれる池」
 - ①現在の聖アンナ教会の敷地内にあった池
 - ②縦約90m、横約66m(50m)
 - ③「五つの回廊」があった。4辺+中央の仕切りで、5つとなる。

3. 3~5節(4節は後代の付加)

Joh 5:3 その中には、病人、目の見えない人、足の不自由な人、からだに麻痺のある人たちが大勢、横になっていた。

Joh 5:5 そこに、三十八年も病気にかかっている人がいた。

- (1) 古代には、癒やしの宮(神殿)というものが多く存在していた。
 - ①代表的なものは、アスクレピウス(アポロの息子)の神殿である。
 - ②癒やしを受ける条件は、隣接する泉や湧き水で身を清めること。
 - ③この箇所では、イエスが癒やしの宮以上の方であることが証明される。
- (2) 肉体的癒やしを待つ人々が、大勢そこに伏せていた。
 - ①彼らは、水が動くのを待っていたのである。
 - ②恐らく、間欠泉があったのであろう。
- (3) 「三十八年も病気にかかっている人がいた」
 - ①イスラエルの荒野の放浪期間にほぼ等しい。

- ②当時の平均寿命以上の年数である。
- ③古代の癒やし物語は、病気の年数によって、その素晴らしさを表現した。

4. 6~7節

Joh 5:6 イエスは彼が横になっているのを見て、すでに長い間そうしていることを知ると、彼に言われた。「良くなりたいか。」

Joh 5:7 病人は答えた。「主よ。水がかき回されたとき、池の中に入れてくれる人がいません。行きかけると、ほかの人が先に下りて行きます。」

- (1) イエスは、最も悲惨な人を選んだのであろう。
 - ①イエスの目がその人に注がれた。
 - ②イエスは、群衆の中にいる個人に目をとめられる。
 - *ニコデモ、サマリアの女、王室の役人
 - ③イエスの知識
 - *超自然的なものなのか。
 - *観察によるものなのか。
 - *あるいは、噂を聞いたのか。
- (2) イエスはなぜ、「よくなりたいか」と質問したのか。
 - ①病人は、回復への意欲を失うことがある。
 - ②さらに、病気の状態に逃げ込むこともある。
 - ③この質問には、病人に希望の灯をともし力がある。
- (3) 彼の回答は、その心の状態を映し出すものである。
 - ①彼は、「イエス」、「ノー」で答えていない。
 - ②彼は、癒やされない理由を述べている。
 - ③彼は、他者への批判のことばを語っている。
 - ④責任転嫁が彼の習い性になっていた。

5. 8~9節

Joh 5:8 イエスは彼に言われた。「起きて床を取り上げ、歩きなさい。」

Joh 5:9 すると、すぐにその人は治って、床を取り上げて歩き出した。ところが、その日は安息日であった。

- (1) イエスは、自分で行動を起こすように命じた。
 - ①イエスの癒やしは、肉体だけでなく、内面の癒やしも含む。
 - ②ここでは、癒やしを受ける側の信仰は問われていない。
 - *公生涯の後半に入ると、信仰が癒やしの条件になってくる。

(2) 「すると、すぐにその人は治って、床を取り上げて歩き出した」

- ①神のことばに従うなら、神はそのことばを通して働かれる。
- ②その人の筋肉はすぐに回復された。
- ③この癒やしは、イエスのメシア性を証明する奇跡である。
 - *イザ35:1~7(足の萎えた者の癒やし)
- ④エルサレム中の人たちは、この奇跡を目撃することができた。
- ⑤イエスがこの人を選んだ理由は、そのことなのかもしれない。

(3) 「ところが、その日は安息日であった」

- ①安息日について(出20:8~11)
 - *安息日は、休息の日である。
 - *安息日は、【主】に感謝する日である。
 - *安息日は、自由の民となったことを記念する日である。
- ②口伝律法による安息日の理解
 - *イエス時代には、安息日の規定が1500以上も存在した。
 - *安息日は、ユダヤ教の初期の段階で、擬人法化された。
 - *安息日は、「ヤハウエの女王」であり、「イスラエルの花嫁」である。
- ③イエス時代のパリサイ人の教え
 - *すべてのユダヤ人が安息日を完全に守ったなら、メシアが来られる。
- ④イエスとパリサイ人の論争が起こるのは、当然のことである。

II. パリサイ人たちの敵意(5:10~18)

1. 10~11節

Joh 5:10 そこでユダヤ人たちは、その癒やされた人に、「今日は安息日だ。床を取り上げることは許されていない」と言った。

Joh 5:11 しかし、その人は彼らに答えた。「私を治してくださった方が、『床を取り上げて歩け』と私に言われたのです。」

(1) 「きょうは安息日だ。床を取り上げることは許されていない」

- ①ユダヤ人たちとは、宗教的指導者たちのこと。
- ②反発の理由は、その人が安息日の規定に違反したから。
 - *彼らは、癒やされた人を見るのではなく、律法違反に目をとめた。
- ③安息日に、物のある領域から別の領域に運ぶことは禁じられていた。
 - *公の場から私的場へ、私的場から公の場へ
 - *この場合は、私的場から公の場に運ばれた。
 - *特に、床を運ぶことは厳しく禁じられた。

(2) この人は、死の危険に直面した。

①彼は、言い逃れのことばを語った。

②自分を癒やしてくれた方に、責任をなすりつけている。

2. 12~13 節

Joh 5:12 彼らは尋ねた。「『取り上げて歩け』とあなたに言った人はだれなのか。」

Joh 5:13 しかし、癒やされた人は、それがだれであるかを知らなかった。群衆がそこにいる間に、イエスは立ち去られたからである。

(1) この人は、イエスに関する知識が全くない。

①この癒やしは、一方的な恵みによるものである。

②肉体の癒やしは起こったが、魂の癒やしは起こっていない。

3. 14~15 節

Joh 5:14 後になって、イエスは宮の中で彼を見つけて言われた。「見なさい。あなたは良くなりました。もう罪を犯してはなりません。そうでないと、もっと悪いことがあなたに起こるかもしれない。」

Joh 5:15 その人は行って、ユダヤ人たちに、自分を治してくれたのはイエスだと伝えた。

(1) イエスがこの人を見つけてくださった。

①イエスは、魂の癒やしを与えようとしている。

(2) 「もう罪を犯してはなりません。そうでないと、もっと悪い事があなたに起こるかもしれない」

①「罪を犯し続けてはなりません」という意味である。

②一般的な意味で、罪は病と死の原因である。

③しかし、特定の病を罪の結果と言ってはならない。

④この人は、癒やされてからも罪を犯し続けていた。

⑤この人に、イエスからの警告が与えられた。

*38年の病気以上の悪いこととは、永遠の苦しみのことである。

(3) この人は、ユダヤ人たちに密告した。

①感謝の思いから出たことではなく、これは、責任逃れたための行為である。

4. 16~17 節

Joh 5:16 そのためユダヤ人たちは、イエスを迫害し始めた。イエスが、安息日にこのようなことをしておられたからである。

Joh 5:17 イエスは彼らに答えられた。「わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです。」

- (1) 反発の矛先はイエスに向かう。
 - ①安息日に癒やしを行った。
 - ②癒やされた人に、床を運ばせた。

- (2) 「わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです」
 - ①確かに神は、天地創造の後も、宇宙の運行を支えておられる。
 - ②すべての生き物は、神によってその命が保たれている。

- (3) イエスは、神を「わたしの父」と呼ばれた。
 - ①ユダヤ人たちは、神を「私たちの父」を呼んだ。
 - ②「わたしの父」という呼びかけは、父と対等であるという意味である。
 - ③これは、イエスの神性宣言である。
 - ④ユダヤ的理解では、長子は父と同格と見なされる。
 - ⑤ユダヤ人の指導者たちは、それを理解した。
 - ⑥「イエスは、自分が神だと言ったことはない」というのは嘘である。

5. 18節

Joh 5:18 そのためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っていただけでなく、神をご自分の父と呼び、ご自分を神と等しくされたからである。

- (1) イエスに対する殺意が、初めて登場する。
 - ①安息日違反
 - *イエスがメシアであるなら、安息日を守るはずである。
 - ②神への冒瀆
 - *神を自分の父と呼んだ。

結論

1. 祭りの名前が出てくる箇所

- (1) 2:13 (過越の祭り) →十字架の死と復活への言及
- (2) 6:4 (過越の祭り) →パンの奇跡
- (3) 7:2 (仮庵の祭り) →聖霊傾注の預言
- (4) 10:22 (宮きよめの祭り) →ユダヤ人の靈性は冬の状態
- (5) 11:55 (過越の祭り) →神の子羊イエス

2. 5:1の祭り

- (1) どの祭りかは重要な要素ではない。
- (2) 重要な真理
 - ①イエスは、メシアとしての奇跡を行われた。
 - ②イエスは、父と同じように安息日でも働きを継続される。
 - ③イエスは、自分と神と等しいとされた。

3. 5章の病人と9章の盲人の対比

- (1) 古代文学には、対比によって論点を鮮明にするという特徴がある。
- (2) 共通点
 - ①ともに、癒しを受けた。
 - ②ともに、恵みによる癒しであった。
 - ③ともに、イエスによって見い出された。
- (3) 相違点
 - ①5章の病人は、癒しを受けただけで、信仰に至っていない。
 - *責任転嫁
 - *イエスから警告を受けた。
 - *その後、イエスについて密告している。
 - ②9章の盲人は、信仰に至っている。
 - *事実を証言し、そのための犠牲を払っている。
 - *その後、イエスに見い出された。
 - *ヨハ9:35~38

Joh 9:35 イエスは、ユダヤ人たちが彼を外に追い出したことを聞き、彼を見つけ出して言われた。「あなたは人の子を信じますか。」

Joh 9:36 その人は答えた。「主よ、私が信じることができるように教えてください。その人はどなたですか。」

Joh 9:37 イエスは彼に言われた。「あなたはその人を見えています。あなたと話しているのが、その人です。」

Joh 9:38 彼は「主よ、信じます」と言って、イエスを礼拝した。

ヨハネの福音書(12)

父と子は同等

ヨハ5:19~29

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ①公生涯への序曲(1:19~51)
 - ②初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - ⑥2度目のエルサレム訪問(5:1~47)

2. 注目すべき点

- (1) 1~4章は、ユダヤ、サマリア、ガリラヤでの個人に対する奉仕の記録。
- (2) 5~10章は、パリサイ人たちとの論争の記録。
- (3) 5~10章で、信仰と不信仰の亀裂が深まる。
 - ①私たちが信じているイエスがどういうお方であることを理解する。
 - ②理解することは、信仰が増すことである。

3. アウトライン: 2度目のエルサレム訪問

- (1) 第3のしるし(5:1~9)
- (2) パリサイ人たちの敵意(5:10~18)
- (3) 父と子は同等(5:19~29)
- (4) 父の証言(5:30~47)

4. 結論: 3つの復活

2度目のエルサレム訪問の内容について学ぶ。

I. 第3のしるし(5:1~9)

- (1) 38年間病気であった人が癒された。
- (2) 彼は、安息日に床を取り上げて歩いた。

II. パリサイ人たちの敵意(5:10~18)

- (1) パリサイ人たちは、イエスに対して敵意を示した。

(2) 「わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです」。イエスは、ご自分を神と等しいとされた。

III. 父と子は同等 (5:19~29)

1. 19節

Joh 5:19 イエスは彼らに答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分から何も行うことはできません。すべて父がなさることを、子も同様に行うのです。」

(1) 1~4章と5~10章は、視点が異なる。

①1~4章は、外面からイエスを描いている。

②5~10章は、イエスの内面を描写している。

*急に分かりやすくなるが、同時に、難しくなる。

(2) ユダヤ人の指導者たちの敵意が、イエスの弁明を引き出した。

①イエスは父と同等である。

②イエスは人類のさばき主である。

③イエスの主張を保証する証人がいる。

(3) 「まことに、まことに、あなたがたに言います」

①厳粛な内容を教える際の常とう句である。

②イエスは、ご自身の内面を啓示される。

③イエスは、ユダヤ人の家庭生活を例に取って教える。

*ユダヤ人の家庭では、子は、父を真似ることによって、職業を学ぶ。

*子は、自分から何も行うことはできない。

*父が手本を示し、子が同様に行う。

*イエスも同じようにして、大工仕事を学んだ。

④父なる神とイエスの関係が、地上の親子関係の原型である。

*父は子を愛しておられる。

*父は、ご自分がすることをすべて、子にお示しになる。

2. 20節

Joh 5:20 それは、父が子を愛し、ご自分がすることをすべて、子にお示しになるからです。また、これよりも大きなわざを子にお示しになるので、あなたがたは驚くこととなります。」

(1) 父が、ご自分がすることをすべて子に示すのは、子を愛しているからである。

①子が父と同じように行動できるのは、子も神だからである。

②子は、父から独立した神であることを目指しているわけではない。

- ③子は、父に従順な神である。
- ④イエスは奴隷ではなく、「父の子」である。

(2) 「これよりも大きなわざを子にお示しになる」

- ①「これ」とは、38年間歩けなかった人を癒し、床を運ばせたことである。
 - *この癒しは、イエスの権威の小規模な証明である。
- ②「これよりも大きなわざ」
 - *死人をよみがえらせること(21節)
 - *人類をさばくこと(22節)
- ③目的は、人々が驚くようになるためである。

3. 21節

Joh 5:21 父が死人をよみがえらせ、いのちを与えられるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。

- (1) 父は死人をよみがえらせ、いのちを与えられる。
 - ①子もまた、与えたいと思う者にいのちを与える。

- (2) ユダヤ人たちは、神だけが死者をよみがえらせることができると信じた。
 - ①エゼ37:13

Eze 37:13 わたしの民よ。わたしがあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓から引き上げる時、あなたがたは、わたしが【主】であることを知る。

- ③イエスは今、自分には死者をよみがえらせる権威があると宣言している。
- ④その権威は、ラザロの蘇生によって証明される(11:41~44)。

4. 22節

Joh 5:22 また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子に委ねられました。

- (1) 子は人類を裁く。
 - ①これは、ユダヤ人たちにとっては新しい情報である。
 - ②彼らは、父はすべての人のさばき主であると信じていた。
 - *創18:25

Gen 18:25 正しい者を悪い者とともに殺し、そのため正しい者と悪い者が同じようになる、というようなことを、あなたがなさることは絶対にありません。そんなことは絶対にあり得ないことです。全地をさばくお方は、公正を行うべきではありませんか。」

- ③彼らは、すべての人は終わりの日に父の前に立つと信じていた。

- (2) ここでは、父と子の役割分担が啓示される。

①父は子に、すべてのさばきを委ねられた(終末論的な権威の付与)。

②子が行うさばきの内容

*各人の行いの評価

*最終的なさばきの宣言

5. 23節

Joh 5:23 それは、すべての人が、父を敬うのと同じように、子を敬うようになるためです。子を敬わない者は、子を遣わされた父も敬いません。

(1) 子にさばきの権威が与えられている理由は、何か。

①すべての人が、父を敬うのと同じように、子を敬うようになるため。

②父は、ご自身の栄光を他の神々と分かち合うことはない。

*イザ42:8、10~12

③しかし、父は子をご自分と同じ栄光を持つことを喜ばれる。

*子が神であることを示している。

(2) 父と子は一つである。

①父を敬う者は、子を敬うようになる。

②子を敬わない者は、子を遣わされた父も敬わない。

③イエスを信じないグループ

*ユダヤ教、イスラム教、モルモン、エホバの証人、統一教会

*これらのグループの人でも、イエスを神の子と信じるなら救われる。

6. 24節

Joh 5:24 まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からのちに移っています。

(1) 「まことに、まことに」

①これから厳粛な教えが語られる。

②イエスは、父から聞いたことしか語らない。

③それゆえ、イエスを信じることはイエスを遣わした父を信じることである。

④父を信じる者は、死からのちに移っている。

*その人は、永遠のいのちを持っている。

*その人は、さばきにあうことがない。

⑤その人は、終末論的祝福をすでに経験している。

*クリスチャンは、未来を先取りして今を生きている。

(2) これは、イエスを信じて救われよという招きのことばでもある。

①1 ヨハ3:14

1Jn 3:14 私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。兄弟を愛しているからです。愛さない者は死のうちにとどまっています。

7. 25~26 節

Joh 5:25 まことに、まことに、あなたがたに言います。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。それを聞く者は生きます。

Joh 5:26 それは、父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようになさったからです。

(1) 「まことに、まことに」

①厳粛な教えが語られる。

②神の子の声を聞いて信じる人は、生きるようになる。

③2重の実現がある。

*今それが実現している。

・死人(罪人)は、神の子のことばを信じることで新生する。

*将来それが実現するようになる。

・死人(肉体的に死んだ人)は、栄光のからだによみがえる。

(2) 子が死人をよみがえらせることができる理由

①子のうちにいのちが宿っている。

②父がそのようにして下さった(ある時にそうなったという意味ではない)。

③この状態は、永遠の昔から続いているものである。

④私たちのうちにあるいのちは、与えられたものである。

⑤子のうちにあるいのちは、最初から持っているいのちである。

⑥1:4

Joh 1:4 この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。

8. 27 節

Joh 5:27 また父は、さばきを行う権威を子に与えてくださいました。子は人の子だからです。

(1) 父がさばきを行う権威を子に与えて下さった理由

①子は人の子だからである。

②「人の子」とは、メシアのタイトルである。

*ダニ7:13~14

③このタイトルは、メシアの人間性を強調したものである。

- ④定冠詞の付いていない「人の子」は、イエスの本質を示している。
- ⑤イエスは完璧な人間性を有しているので、人をさばくことができる。

*ヘブ2:17

Heb 2:17 したがって、神に関わる事柄について、あわれみ深い、忠実な大祭司となるために、イエスはすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それで民の罪の宥めがなされたのです。

Heb 2:18 イエスは、自ら試みを受けて苦しまれたからこそ、試みられている者たちを助けることができるのです。

9. 28~29 節

Joh 5:28 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。

Joh 5:29 そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます。

- (1) イエスは、驚いてはならないと勧告する。
 - ①死んだ者がみな、子の声を聞く時が来る。
 - ②その結果、2種類の復活が起こる。
- (2) 「善を行った者」とは、イエスを信じた者である。
 - ①6:28~29

Joh 6:28 すると、彼らはイエスに言った。「神のわざを行うためには、何をすべきでしょうか。」

Joh 6:29 イエスは答えられた。「神が遣わした者をあなたがたが信じること、それが神のわざです。」

- ②信者の肉体的復活は、永遠のいのちをもたらすためのものである。
 - *信者は、霊的には永遠のいのちを得ている(終末論的祝福の先取り)。

- (3) 「悪を行った者」とは、イエスを信じなかった者である。
 - ①不信者の肉体的復活は、さばきを受けるためのものである。
 - *不信者は、すでにさばかれている(終末論的さばきの先取り)。

結論：3種類の復活

1. 霊的復活

- (1) 5:24~25

Joh 5:24 まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています。

Joh 5:25 まことに、まことに、あなたがたに言います。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。それを聞く者は生きます。

- ①イエスを信じる者は、イエスを遣わされた方を信じる者である。
- ②その人は、死からいのちに移っている。
- ③これは完了した祝福なので、取り消されることはない。
- ④霊的復活の時は、今である。

2. 信者の復活

(1) 5:28~29

Joh 5:28 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。

Joh 5:29 そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます。

- ①善を行った者とは、イエスを信じ、霊的に復活した者である。
- ②教会時代の信者は、携挙の時に復活する。
- ③それ以外の信者は、再臨の後で復活する。

3. 不信者の復活

(1) 5:28~29

Joh 5:28 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。

Joh 5:29 そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます。

- ①悪を行った者とは、イエスを信じないで、霊的に死んだ状態で生きた者。
- ②彼らは、千年王国の終りに復活し、最後のさばきを受ける。
- ③不信者は、死によってすべてが終わると考え、好き勝手に生きる。
- ④彼らは、死の先にさばきが待っていることを認めない。

ヨハネの福音書 (13)

父の証言

ヨハ 5 : 30~47

1. 文脈の確認

- (1) 前書き (1 : 1~18)
- (2) イエスの公生涯 (1 : 19~12 : 50)
 - ① 公生涯への序曲 (1 : 19~51)
 - ② 初期ガリラヤ伝道 (2 : 1~12)
 - ③ 最初のエルサレム訪問 (2 : 13~3 : 36)
 - ④ サマリア伝道 (4 : 1~42)
 - ⑤ ガリラヤ伝道の再開 (4 : 43~54)
 - ⑥ 2度目のエルサレム訪問 (5 : 1~47)

2. 注目すべき点

- (1) 1~4章と5~10章は、記述のスタイルが変わる。
- (2) 2度目のエルサレム訪問
 - ① 第3のしるし (5 : 1~9)
 - ② パリサイ人たちの敵意 (5 : 10~18)
 - ③ 父と子は同等 (5 : 19~29)
 - ④ 父の証言 (5 : 30~47)
- (3) 「父の証言」の箇所は、法廷での陳述に似ている。

3. アウトライン：父の証言

- (1) はじめに (30~32節)
- (2) 4種類の証人 (33~47節)
 - ① バプテスマのヨハネ (33~35節)
 - ② イエスのわざ (36節)
 - ③ 父なる神 (37~38節)
 - ④ 旧約聖書 (39~47節)

4. 結論：法廷での陳述

- (1) イエスの主張
- (2) 4種類の証人

4種類の証人について学ぶ。

I. はじめに(30~32節)

1. 30節

Joh 5:30 わたしは、自分からは何も行うことができません。ただ聞いたとおりにさばきます。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたしは自分の意志ではなく、わたしを遣わされた方のみこころを求めるからです。

- (1) イエスは、自分からは何も行うことができない。
 - ①これは、イエスが人間に過ぎないことを教えていると主張する人がいる。
 - ②むしろ、イエスが神であることの証明になっている。
 - ③人間は、神の御心とは無関係に動く。
 - ④イエスは、神の御心を行うことだけを行動の動機としている。
 - ⑤父と子の関係は、愛に基づく調和である。

(2) イエスが自分から何も行うことができない理由

- ①これは、肉体的に不可能だということではない。
- ②これは、道徳的に不可能だということである。
- ③「わたしのさばきは正しい」とは、行動するかどうかの判断である。
- ④イエスは、これまで地上で生きたどんな人物とも異なる。

2. 31~32節

Joh 5:31 もしわたし自身について証しをするのがわたしだけなら、わたしの証言は真実ではありません。

Joh 5:32 わたしについては、ほかにも証しをする方がおられます。そして、その方がわたしについて証しする証言が真実であることを、わたしは知っています。

(1) 申19:15

Deu 19:15 いかなる咎でも、いかなる罪でも、すべて人が犯した罪過は、一人の証人によって立証されてはならない。二人の証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。

- ①「わたしの証言は真実ではありません」
- ②自分の証言だけでは、真実の証明にはならない。
- ③そこでイエスは、別の証人を挙げる。
- ④ここでは、4種類の証人が挙げられる。
- ⑤「ほかにも証しをする方がおられます」とは、父なる神のことである。
 - * イエスの判断と行いは、父なる神と完全に一致している。
- ⑥ユダヤ人たちは、イエスのこの認識を受け入れない。
- ⑦そこでイエスは、4種類の証人を挙げる。

II. 4種類の証人(33~47節)

1. バプテスマのヨハネ(33~35節)

(1) 33節

Joh 5:33 あなたがたはヨハネのところに人を遣わしました。そして彼は真理について証しました。

- ①ユダヤ人の指導者たちは、ヨハネのところに人を遣わした(1:19~28)。
- ②しかしヨハネは、人々の関心を自分に向けさせることはしなかった。
- ③彼は、真理について証した(1:7)。
- ④真理とは、神の子イエスである。

(2) 34節

Joh 5:34 わたしは人からの証しを受けませんが、あなたがたが救われるために、これらのことを言うのです。

- ①人の証しだけでは、イエスが神の子であることの証明にはならない。
- ②バプテスマのヨハネは、神から遣わされた使者である。
- ③彼は、イエスがメシアであり、神の子羊であることを証言した(1:29~34)。
- ④イエスがパリサイ人たちと対話するのは、彼らが救われるためである。
 - * イエスを約束のメシアと信じるなら、救われる。
 - * イエスは、敵対者さえも愛しておられる。
 - * しかし彼らは、あらゆる手段でイエスを殺そうとするようになる。

(3) 35節

Joh 5:35 ヨハネは燃えて輝くともしびであり、あなたがたはしばらくの間、その光の中で大いに喜ぼうとしました。

- ①イエスはヨハネのことを「燃えて輝くともしび」と評価された。
- ②ヨハネは、自らの命を燃やすことによって、人々に光をもたらした。
- ③民衆は、ヨハネを宗教的指導者として受け入れた。
- ④しかし、その状況は長続きしなかった。
- ⑤彼らは、先駆者は受け入れたが、メシアは拒否した。
- ⑥真の悔い改め(意識の変更)がなかったからである。
- ⑦ヨハネが死んで以降は、その教えに従わなかった。

2. イエスのわざ(36節)

Joh 5:36 しかし、わたしにはヨハネの証しよりもすぐれた証しがあります。わたしが成し遂げるようにと父が与えてくださったわざが、すなわち、わたしが行っているわざそのものが、わたしについて、父がわたしを遣わされたことを証ししているのです。

- (1) イエスが行っているわざが、ヨハネの証しよりもすぐれた証しである。
 - ① イエスが行っているわざは、父が与えてくださったものである。
 - ② イエスの内には力が宿っている。
 - ③ イエスはその力を使徒たちに付与することができた。
 - ④ イエスのわざは、質、多様性、数において、比類なきものである。
 - ⑤ それらが、イエスが神から派遣されたメシアであることを証ししている。

3. 父なる神(37~38節)

Joh 5:37 また、わたしを遣わされた父ご自身が、わたしについて証しをしてくださいました。あなたがたは、まだ一度もその御声を聞いたことも、御姿を見たこともありません。

Joh 5:38 また、そのみことばを自分たちのうちにとどめてもいません。父が遣わされた者を信じないからです。

- (1) 父は、イエスについて証しをされた。
 - ① イエスが洗礼を受けた場面では、父なる神の声が聞こえた(1:32~34)。
 - ② これ以外にも、父なる神は2度証言された。
 - * 変貌山にて(マタ17:5)
 - * ギリシア人が面会を求めたときに(12:28)
- (2) 不信仰なユダヤ人たちは、その御声を聞いたことも、御姿を見たこともない。
 - ① 神は、旧約聖書を通して彼らに語っておられた。
 - * みことばを自分のうちにとどめていない者には、神の声は聞こえない。
 - ② 神は霊であるが、受肉したメシアによって御姿が現れた。
 - * 父が遣わした者を信じないので、その姿が見えない。

4. 旧約聖書(39~47節)

(1) 39~40節

Joh 5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証ししているものです。

Joh 5:40 それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。

- ① 「聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書をしらべています」
 - * 彼らは、聖書の学びによって永遠のいのちが得られると考えていた。
 - * つまり、わざによって永遠のいのちが得られると考えていたのである。
- ② 旧約聖書は、主にイエスについて証言している。
 - * 旧約聖書を学びながら、かくも盲目になっているのは悲劇である。
- ③ 彼らは、いのちを得るためにイエスのもとに来ようとはしない。

- * イエスの教えを理解できないからではない。
- * 罪の生活を放棄したくないからである。

(2) 41~42 節

Joh 5:41 わたしは人からの栄誉は受けません。

Joh 5:42 しかし、わたしは知っています。あなたがたのうちに神への愛がないことを。

- ① イエスは、人からの栄誉を求めている。
- * イエスが求めているのは、父なる神からの栄誉である。
- ② ユダヤ人たちがイエスを信じない理由は、神への愛がないからである。
- * 神を愛しているなら、神が派遣したイエスを信じるはずである。

(3) 43 節

Joh 5:43 わたしは、わたしの父の名によって来たのに、あなたがたはわたしを受け入れません。もしほかの人がその人自身の名で来れば、あなたがたはその人を受け入れます。

- ① イエスは、父の名によって来た。
- * イエスは、父の代理人である。
- * イエスは、父の栄光を表す。
- * ユダヤ人たちは、そのイエスを受け入れない。
- ② ほかの人物の登場が預言される。
- * 彼は、自分自身の名で来る。
- * ユダヤ人たちは、その人物を受け入れる。
- * 偽教師たち、偽キリストたちが多く出た。
- * 究極的には、反キリストのことである。

③ 2テサ2:8~10

2Th 2:8 時が来れば、いよいよこの反キリストが現れることとなりますが、主イエスが来られ、御口の息と輝きによって、彼を滅ぼしてしまわれます。

2Th 2:9 この反キリストは悪魔の手先であり、悪魔のあらゆる力を与えられてやって来ます。不思議なわざを見せては人々をだまし、力ある奇跡を行う者であるかのように見せかけるのです。

2Th 2:10 こうして、真理を拒んで滅びへの道を走る者たちを、すっかりとりこにします。その人たちは、真理を信じることも愛することもせず、救われようなどとは考えもしませんでした。

(4) 44 節

Joh 5:44 互いの間では栄誉を受けても、唯一の神からの栄誉を求めないあなたがたが、どうして信じることができるでしょうか。

- ①パリサイ人たちは、人間からの栄誉を求めている。
- ②彼らは、ユダヤ教を離れることから来る迫害を恐れていた。
- ③彼らは、唯一の神からの栄誉を求めなかった。
- ④神からの栄誉よりも人間からの栄誉を求める者は、救われない。

(5) 45~46 節

Joh 5:45 わたしが、父の前にあなたがたを訴えると思っはなりません。あなたがたを訴えるのは、あなたがたが望みを置いているモーセです。

Joh 5:46 もしも、あなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずで。モーセが書いたのはわたしのことなのですから。

- (1) 彼らを父なる神の前に訴える必要はない。
 - ①モーセの律法(五書)が彼らを訴えるからである。
 - ②彼らは、モーセの律法が与えられていることを誇りとしていた。
 - ③しかし彼らは、モーセの律法に従わなかった。
- (2) イエスは、モーセの律法の権威を認めた。
 - ①モーセが書いたことを信じているなら、イエスを信じたはずである。
 - ②モーセの律法は、メシアの到来を預言している。
 - ③メシアが到来したなら、その方に聞き従わなければならない。

*申18:15、18:18

(6) 47 節

Joh 5:47 しかし、モーセが書いたものをあなたがたが信じていないのなら、どうしてわたしのことばを信じるでしょうか。」

- ①モーセの律法を信じない者は、イエスのことばを信じない。
- ②今も同じことが起こっている。
 - *モーセの五書の靈感を疑う人が多くいる。
 - *やがて彼らは、イエスのことばも疑うようになる。

結論：法廷での陳述

1. イエスの主張

- (1) 神をご自分の父と呼ばれた(18節)。
- (2) 永遠のいのちを与えることができると言われた(24節)。
- (3) 自分のうちにいのちを持っていると言われた(26節)。
- (4) さばきを行う権威を持っていると言われた(27節)。

2. 4種類の証人

(1) バプテスマのヨハネ(33~35節)

- ①バプテスマのヨハネは、神から遣わされた使者である。
- ②彼は、イエスが神の子羊であることを証言した(1:29~34)。
- ③彼は、自らのいのちを燃やすことによって、人々に光をもたらした。
- ④ユダヤ人たちは、先駆者は受け入れたが、メシアは拒否した。

(2) イエスのわざ(36節)

- ①イエスのわざは、ヨハネの証しよりもすぐれた証しである。
- ②イエスが行っているわざは、父が与えてくださったものである。
- ③イエスのわざは、質、多様性、数において、比類なきものである。
- ④それらが、イエスが神から派遣されたメシアであることを証ししている。

(3) 父なる神(37~38節)

- ①父は、イエスについて証しをされた。
- ②天からの声は、イエスの公生涯において3度聞こえてきた。
- ③不信仰な者たちは、御声を聞いたことも、御姿を見たこともない。
- ④神は霊であるが、受肉したメシアによって御姿が現れた。

(4) 旧約聖書(39~47節)

- ①ユダヤ人たちは、聖書の学びによって永遠のいのちを得ようとした。
- ②旧約聖書は、主にイエスについて証言している。
- ③彼らは、いのちを得るためにイエスのもとに来ようとはしない。
- ④ユダヤ人たちがイエスを信じない理由は、神への愛がないからである。

ヨハネの福音書 (14)
第4と第5のしるし
ヨハ6:1~21

1. 文脈の確認

- (1) 前書き (1:1~18)
- (2) イエスの公生涯 (1:19~12:50)
 - ①公生涯への序曲 (1:19~51)
 - ②初期ガリラヤ伝道 (2:1~12)
 - ③最初のエルサレム訪問 (2:13~3:36)
 - ④サマリア伝道 (4:1~42)
 - ⑤ガリラヤ伝道の再開 (4:43~54)
 - ⑥2度目のエルサレム訪問 (5:1~47)
 - ⑦後期ガリラヤ伝道 (6:1~7:9)
 - * 第4のしるし: 5,000人の給食 (6:1~15)
 - * 第5のしるし: 水上歩行 (6:16~21)
 - * いのちのパンの説教 (6:22~59)
 - * 説教への応答 (6:60~7:9)

2. 注目すべき点

- (1) 5:47と6:1の間で起こった多くの出来事が、省略されている。
- (2) 共観福音書と異なり、後期ガリラヤ伝道に関する記事はわずかである。
- (3) ヨハネは、イエスの人気が最高潮に達した状況を描いている。

3. アウトライン

- (1) 第4のしるし: 5,000人の給食 (6:1~15)
- (2) 第5のしるし: 水上歩行 (6:16~21)

4. 結論: 私たちへの教訓

- (1) 第4のしるし: 問題解決の方法
- (2) 第5のしるし: 信仰のテスト

第4と第5のしるしについて学ぶ。

I. 第4のしるし: 5,000人の給食 (6:1~15)

1. 1~2節

Joh 6:1 その後、イエスはガリラヤの湖、すなわち、ティベリアの湖の向こう岸に行かれた。

Joh 6:2 大勢の群衆がイエスについて行った。イエスが病人たちになさっていたしるしを見たからであった。

(1) ある時間が経過してから、イエスは湖の向こう岸に行かれた。

①ガリラヤの湖、ティベリアの湖

*ティベリアは湖の西側にある最大の町である。

*ヘロデ・アンティパスが建設した(紀元20年)。

*ローマ皇帝ティベリウスにちなんでティベリアと命名した。

②湖の向こう岸とは、湖の東側(北東)である。

*ユダヤ人の住民は少なく、異邦人が多かった。

(2) 大勢の群衆がイエスについて行った。

①イエスが病人たちに行っていたしるしを見たからである。

②ガリラヤ人たちは、イエスを政治的メシアと理解していた。

2. 3~4節

Joh 6:3 イエスは山に登り、弟子たちとともにそこに座られた。

Joh 6:4 ユダヤ人の祭りである過越が近づいていた。

(1) イエスは、弟子たちとともに静かな時を過ごすために山に登った。

①弟子たちは、ガリラヤの町々での伝道から帰ったばかりである。

*マコ6:30~32、ルカ9:10

②イエスは、ヘロデ・アンティパスがヨハネを斬首したと聞かされた。

*マタ14:12~13

③群衆は、イエスを見つけ、その周りに集まって来た。

④イエスは多くの病人を癒し、彼らを教えた。

*マタ14:14、マコ6:33~34、ルカ9:11

⑤「山に登り」と書いているのは、ヨハネだけである(目撃者情報)。

*群衆は、モーセのような新しい解放者の登場を期待した。

(2) ユダヤ人の祭りである過越が近づいていた。

①イエスが十字架にかかる1年前のことである。

②ヨハネは、「いのちのパン」の説教の準備をしている。

3. 5~6節

Joh 6:5 イエスは目を上げて、大勢の群衆がご自分の方に来るのを見て、ピリポに言われた。

「どこからパンを買って来て、この人たちに食べさせようか。」

Joh 6:6 イエスがこう言われたのは、ピリポを試すためであり、ご自分が何をしようとしているのかを、知っておられた。

- (1) イエスは、食事の問題を解決するために、イニシアティブを取られた。
 - ①ピリポに質問されたのは、彼が近隣の町ベツサイダ出身だからである。
 - ②この質問は、弟子訓練のためのものであった。
 - ③イエスは、自分がしようとすることを知っておられた。

4. 7 節

Joh 6:7 ピリポはイエスに答えた。「一人ひとりが少しずつ取るにしても、二百デナリのパンでは足りません。」

- (1) ピリポは、頭の中で計算した。
 - ①200 デナリとは、労働者の 200 日分の給料である。
 - ②どれくらいのパンが買えたかは分からないが、かなりの量である。
 - ③各人が少しずつ取るにしても、200 デナリのパンでは足りない。

- (2) ピリポは、肉体的レベルでしか考えていない。
 - ①ニコデモ（新しい生まれ変わり）
 - ②サマリアの女（生ける水）

5. 8~9 節

Joh 6:8 弟子の一人、シモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った。

Joh 6:9 「ここに、大麦のパン五つと、魚二匹を持っている少年がいます。でも、こんなに大勢の人々では、それが何になるでしょう。」

- (1) シモン・ペテロの兄弟アンデレは、少年を見つけた。
 - ①少年は、大麦のパン5つと、魚2匹を持っていた。
 - ②大麦は、貧しい人たちが食べていたものである。
 - ③アンデレは、提案したこと自体を恥じた。
 - ④「それが何になるでしょうか」
 - ⑤彼もまた、肉体的レベルにとどまっている。

6. 10 節

Joh 6:10 イエスは言われた。「人々を座らせなさい。」その場所には草がたくさんあったので、男たちは座った。その数はおよそ五千人であった。

- (1) 人間の策が尽きたところからイエスの働きが始まる。
 - ①イエスは、人々を草の上に座らせた。
 - ②混乱を避けるために。

- ③すべての福音書が、男の数はおよそ5千人としている。
- ④この数え方は、家父長制社会における習慣(5千家族)である。

7. 11節

Joh 6:11 そうして、イエスはパンを取り、感謝の祈りをささげてから、座っている人たちに分け与えられた。魚も同じようにして、彼らが望むだけ与えられた。

(1) イエスの奇跡

- ①パンを取り、神に感謝の祈りを献げた(神の御名をたたえた)。
 - *敬虔なユダヤ人の習慣
- ②座っている人たちに分け与えられた。
 - *弟子たちも奉仕をしたが、ヨハネはそれを省いている。
 - *イエスがパンを分け与えている間に、パンは増えた。
- ③魚も同じようにして、彼らに与えた。
 - *彼らが望むだけ与えた。

(2) 自由主義神学の一般的解釈

- ①少年が自分の弁当を差し出した。
- ②それを見て、大人たちは恥ずかしくなり、同じようにした。
- ③その結果、全員が食べることができた。
- ④この解釈を正当化することばは、どこにもない。

7. 12~13節

Joh 6:12 彼らが十分食べたとき、イエスは弟子たちに言われた。「一つも無駄にならないように、余ったパン切れを集めなさい。」

Joh 6:13 そこで彼らが集めると、大麦のパン五つを食べて余ったパン切れで、十二のかごがいっぱいになった。

(1) 人々は、食べて満腹した。

- ①「一つも無駄にならないように、余ったパン切れを集めなさい」
- ②神から与えられたものを無駄にしてはならない。
- ③余ったパン切れは、12のかごいっぱいになった。

8. 14~15節

Joh 6:14 人々はイエスがなさったしるしを見て、「まことにこの方こそ、世に来られるはずの預言者だ」と言った。

Joh 6:15 イエスは、人々がやって来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、再びただ一人で山に退かれた。

(1) 人々は、イエスが行ったことは「しるし」だと理解した。

①イエスは、モーセが預言した預言者である(申18:15~19)。

②人々は、イエスを無理やりガリラヤの王にしようとした。

*政治的解放者としてのメシア像

(2) それを知ったイエスは、再びただ一人で山に退いた。

①神の国が成就する時は、まだきていなかった。

II. 第5のしるし：水上歩行(6:16~21)

1. 16~18節

Joh 6:16 夕方になって、弟子たちは湖畔に下りて行った。

Joh 6:17 そして、舟に乗り込み、カペナウムの方へと湖を渡って行った。すでにあたりは暗く、イエスはまだ彼らのところに来ておられなかった。

Joh 6:18 強風が吹いて湖は荒れ始めた。

(1) 第5のしるしの舞台設定

①イエスは一人で山に退き、祈っていた。

②群衆は解散した。

③弟子たちは湖畔に下りて行き、向こう岸に向かう準備を始めた。

(2) 弟子たちは舟に乗り込んだ。

①カペナウムに向かうためである。

②あたりは暗く、イエスは彼らのところには来ていなかった。

*ヨハネの福音書では、「暗い」に象徴的意味がある。

③強風が吹いて湖は荒れ始めた。

*西から東に吹くガリラヤ湖の突風は有名である。

2. 19~20節

Joh 6:19 そして、二十五ないし三十スタディオンのほど漕ぎ出したころ、弟子たちは、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て恐れた。

Joh 6:20 しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしだ。恐れることはない。」

(1) 弟子たちは、イエスが戻って来ないので、先に舟を漕ぎ出した。

①4~5kmほど漕ぎ出したころ、彼らはイエスを見た。

②正しいタイミングで、イエスに向かって目を上げた。

③イエスは湖の上を歩いて、舟に近づいて来られた。

(2) 弟子たちは恐れた。

- ①イエスがどういうお方であるかを十分に理解していなかったからである。
- ②ヨハネは、抑えた筆致でこの偉大な出来事を記している。

(3) イエスの励ましのことば

- ①「わたしだ。恐れることはない」
- ②ガリラヤ湖を創造したお方は、ガリラヤ湖の嵐を静めることができる。

3. 21節

Joh 6:21 それで彼らは、イエスを喜んで舟に迎えた。すると、舟はすぐに目的地に着いた。

- (1) ここでも奇跡が起こっている。
 - ①イエスを認識した弟子たちは、イエスを喜んで舟に迎えた。
 - ②すると、舟はすぐに目的地に着いた。
 - *舟を漕ぐ必要はなかったのである。

結論：私たちへの教訓

1. 第4のしるし：問題解決の方法

- (1) 自分が持っているものを点検する。
- (2) 持っているものをすべて献げる。
- (3) 後はイエスに委ねる。
 - ①イエスは良き羊飼いだである。
 - ②詩 23:2

Psa 23:2 主は私を緑の牧場に伏させ／いこいのみぎわに伴われます。

2. 第5のしるし：信仰のテスト

- (1) 霊的高嶺から谷底に下る体験
- (2) 信仰のテストは、弟子訓練でもある。
 - ①イエスはやがて弟子たちから去って行く。
 - ②しかしイエスは、弟子たちのために執りなしをされる。
- (3) 信者の戦い
 - ①霊的高嶺から谷底へくだる体験
 - ②暗い時代にあつて嵐の中を通過する体験
 - ③大祭司であるイエスは、天上で祈っておられる。

ヨハネの福音書(15)
いのちのパンの説教(1)
ヨハ6:22~40

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ①公生涯への序曲(1:19~51)
 - ②初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - ⑥2度目のエルサレム訪問(5:1~47)
 - ⑦後期ガリラヤ伝道(6:1~7:9)
 - *第4のしるし:5,000人の給食(6:1~15)
 - *第5のしるし:水上歩行(6:16~21)
 - *いのちのパンの説教(6:22~59)
 - *説教への応答(6:60~7:9)

2. 注目すべき点

- (1) 「恵みとまことはイエス・キリストによって実現した」(ヨハ1:17)
 - ①5,000人の給食は、「恵み」の成就である。
 - ②いのちのパンの説教は、「まこと」の啓示である。
- (2) イエスは、「比喩」を用いてご自身の本質を教えられた。
- (3) いのちのパンの説教は、3つのグループに語られた。
 - ①3つの異なった場所で語られたと考えられる。

3. アウトライン:いのちのパンの説教(1)

- (1) イエスを捜す群衆(6:22~25)
- (2) 群衆に対するイエスの応答(6:26~34)
- (3) いのちのパンのたとえ(6:35~40)

4. 結論:第1の神性宣言

いのちのパンの説教について学ぶ。

I. イエスを捜す群衆(6:22~25)

1. 22節

Joh 6:22 その翌日、湖の向こう岸にとどまっていた群衆は、前にはそこに小舟が一艘しかなく、その舟にイエスは弟子たちと一緒に乗らずに、弟子たちが自分たちだけで立ち去ったことに気づいた。

- (1) 群衆はベツサイダの近郊にとどまっていた(湖の北東)。
 - ①イエスと弟子たちは、すでにカペナウムに移動していた(湖の北西)。
 - ②群衆は、弟子たちが一艘しかない小舟で移動したことに気づいた。
 - ③つまり、イエスはまだ近くにいると判断したのである。

2. 23~24節

Joh 6:23 すると、主が感謝をささげて人々がパンを食べた場所の近くに、ティベリアから小舟が数艘やって来た。

Joh 6:24 群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないことを知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り込んで、イエスを捜しにカペナウムに向かった。

- (1) 群衆がいた場所に、ティベリア(湖の西)から数艘の小舟がやって来た。
 - ①群衆は、イエスも弟子たちもその近辺にはいないと判断した。
 - ②そこで、ティベリアから来た小舟数艘に乗り込み、カペナウムに向った。
 - ③カペナウムは、イエスと弟子たちの活動の本拠地である。

3. 25節

Joh 6:25 そして、湖の反対側でイエスを見つけると、彼らはイエスに言った。「先生、いつここにおいでになったのですか。」

- (1) 群衆は、カペナウムでイエスを見つけた。
 - ①彼らは、イエスがどのようにしてカペナウムに来たのかを知りたがった。
 - ②ヨハネは、イエスが湖の上を歩いて移動されたことを強調している。
 - ③イエスは、パンを食べて満腹した人たちに答える。
 - ④イエスの教えは、十字架の死を前提としたものである。
 - ⑤私たちの立ち位置は、このときの群衆の立ち位置よりも恵まれている。

II. 群衆に対するイエスの応答(6:26~34)

1. 26節

Joh 6:26 イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。」

- (1) イエスは、彼らの質問には答えない。
 - ①湖の上を歩いて移動したとは言わない。

- ②イエスは、彼らが後について来ることを喜ばなかった。
- ③彼らの興味は、イエスにではなく、パンにあった。
- ④今日でも、物質的祝福を得ようとしてイエスに近づく人がいる。
- ⑤物質的祝福よりも、主イエスを知ったことを喜ぶべきである。

2. 27節

Joh 6:27 なくなってしまう食べ物のためではなく、いつまでもなくなるらない、永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい。それは、人の子が与える食べ物です。この人の子に、神である父が証印を押されたのです。」

(1) イエスの比喩のことば

- ①サマリアの女には、「生ける水」(4:10、14)の話がされた。
- ②ガリラヤ人たちには、「永遠のいのちに至る食べ物」の話がされる。
- ③イエスは、肉体の糧と霊の糧を対比される。
- ④食事は重要であるが、それが人生の優先事項になってはならない。
- ⑤肉体的満たし以上に大切なのは、霊的満たしである。
- ⑥「永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい」。信じるということ。

(2) イエスが与える食べ物は、永遠のいのちに至る食べ物である。

- ①イエスは、「人の子」(メシア)である。
- ②5,000人のパンの奇跡は、イエスが神であり人であることを示した。
- ③「証印」は真正さの証明である。イエスは、父の代理人として行動している。
- ④それゆえ、イエスの行いや教えには、権威がともなっている。

3. 28~29節

Joh 6:28 すると、彼らはイエスに言った。「神のわざを行うためには、何をすべきでしょうか。」

Joh 6:29 イエスは答えられた。「神が遣わした者をあなたがたが信じること、それが神のわざです。」

(1) 彼らは、イエスのことばを誤解している。

- ①イエスは霊の糧の話をしているのに、彼らは肉の糧のことを考えている。
- ②彼らは、努力によって「神のわざ」を行うことができていると思っている。
- ③わざによって救いに貢献するという事は、罪人が求めることである。

(2) イエスは、神が要求するわざとは、信じることであると教える。

- ①信仰の対象は、神が遣わした者、つまりイエスである。
- ②救われた者だけが良いわざを行うことができる。その逆ではない。

4. 30~31節

Joh 6:30 それで、彼らはイエスに言った。「それでは、私たちが見てあなたを信じられるように、どんなしるしを行われるのですか。何をしてくれますか。

Joh 6:31 私たちの先祖は、荒野でマナを食べました。『神は彼らに、食べ物として天からのパンを与えられた』と書いてあるとおりです。」

- (1) 彼らは、イエスを信じるためのしるしを求めた。
 - ①前日に体験したパンの奇跡では不十分である。
 - ②彼らの要求は、とどまるところを知らない。
 - ③彼らは、見たなら信じるというのが、順番が逆である。

- (2) 彼らは、モーセが荒野で与えたマナ以上の食べ物を要求した。
 - ①背景には、メシアはマナの奇跡を更新するというユダヤ人の期待があった。
 - ②イエスは、地上のパンを増やしたが、天からのパンを与えたわけではない。
 - ③詩 78:24~25 参照

5. 32~33節

Joh 6:32 それで、イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。モーセがあなたがたに天からのパンを与えたのではありません。わたしの父が、あなたがたに天からのまことのパンを与えてくださるのです。

Joh 6:33 神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものなのです。」

- (1) イエスは、モーセが天からのパンを与えたのではないと教えた。
 - ①彼らは、モーセこそ祝福の源であると考えていた。
 - ②モーセの死とともにマナの供給は止んだと考えていた。

- (2) イエスは、マナを与えた神は、今や新しいパンを与えてくださると教える。
 - ①イエスは神を「わたしの父」と呼ばれた。
 - ②マナは、食べればそれで終わりである。
 - ③新しいパンは、「天からのまことのパン」である。
 - ④それは、人間に永遠の満足を与えるパンである。
 - ⑤ユダヤ人だけでなく、世（全人類）にいのちを与えるパンである。

6. 34節

Joh 6:34 そこで、彼らはイエスに言った。「主よ、そのパンをいつも私たちにお与えください。」

- (1) イエスのことばは、彼らを動かした。

- ①サマリアの女は、「その水を私に下さい」(4:15)と言った。
- ②ガリラヤ人たちは、「そのパンをいつも私たちにお与えください」と言った。
- ③彼らは依然として肉の糧のことを考えている。
- ④イエスは、そのパンとは自分のことであると宣言する準備ができた。

III. いのちのパンのたとえ(6:35~40)

1. 35節

Joh 6:35 イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」

- (1) イエスはパンではなく、ご自身を差し出された。
 - ①イエスのもとに来ることと、イエスを信じることは、同じ意味である。
 - ②イエスこそ魂に永遠の満たしを与えるお方である。
 - ③「わたしがいのちのパンです」は、イエスの神性宣言である。

2. 36節

Joh 6:36 しかし、あなたがたに言ったように、あなたがたはわたしを見たのに信じません。」

- (1) しかし、ガリラヤ人たちは、イエスを見ているのに信じない。
 - ①エルサレムのユダヤ人たちが信じなかったのと同じである(5:36~38)。
 - ②だからと言って、神の計画が失敗したわけではない。

3. 37節

Joh 6:37 父がわたしに与えてくださる者はみな、わたしのもとに来ます。そして、わたしのもとに来る者を、わたしは決して外に追い出したりはしません。」

- (1) 信じる者には、父なる神の恵みが強く働いている。
 - ①神の恵みによって選ばれた者はみな、イエスのもとに来る。
 - ②個人的な決断の背後に、神の選びがある。

- (2) 「わたしのもとに来る者を、わたしは決して外に追い出したりはしません」
 - ①これは、修辭的事ばである。
 - ②肯定的なことを強調するために、否定的な表現を用いる。
 - * 「これは小さな問題ではない」という表現と同じである。
 - ③自分が選ばれているかどうかを知る唯一の方法は、信じることである。

4. 38~39節

Joh 6:38 わたしが天から下って来たのは、自分の思いを行うためではなく、わたしを遣わされた方のみこころを行うためです。」

Joh 6:39 わたしを遣わされた方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしが一人も失うことなく、終わりの日によみがえらせることです。

(1) イエスの生涯は、ベツレヘムの家畜小屋から始まったわけではない。

- ①イエスは永遠の昔からおられるお方である。
- ②イエスは、天から下って来た。
- ③その目的は、父なる神のみこころを行うためである。
- ④イエスの思いは、父なる神の思いと完全に合致している。

(2) 父なる神の御心

- ①イエスは、父なる神から与えられてすべての信者を守られる。
- ②普遍的教会に属するすべての者は、救いを失うことがない。
- ③イエスは、すべての信者を「終わりの日」によみがえらせる。
- ④「終わりの日」とは、携挙の時である。
 - *主イエスは栄光とともに空中に戻って来られる。
 - *すでに死んだ者たちは、復活のからだを与えられる。
 - *生きている者たちは、栄化されて生きてまま天に挙げられる。

5. 40節

Joh 6:40 わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持ち、わたしがその人を終わりの日によみがえらせることなのです。」

(1) 父なる神の御心

- ①御子イエスを見る（霊的に主イエスの本質を理解する）。
- ②イエスを救い主として信じる。
- ③信じた人は、永遠のいのちを持つ。
- ④イエスは、信じた人を終わりの日によみがえらせる。

結論：第1の神性宣言

1. 「わたしがいのちのパンです」(6:35, 48)

- (1) 「I AM」宣言
- (2) イエスは、いのちを支え、満足を与える方である。
- (3) イエスは、パンではなくご自身を差し出された。

ヨハネの福音書(16)
いのちのパンの説教(2)
ヨハ6:41~59

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ①公生涯への序曲(1:19~51)
 - ②初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - ⑥2度目のエルサレム訪問(5:1~47)
 - ⑦後期ガリラヤ伝道(6:1~7:9)
 - *第4のしるし:5,000人の給食(6:1~15)
 - *第5のしるし:水上歩行(6:16~21)
 - *いのちのパンの説教(6:22~59)
 - *説教への応答(6:60~7:9)

2. 注目すべき点

- (1) 「恵みとまことはイエス・キリストによって実現した」(ヨハ1:17)
 - ①5,000人の給食は、「恵み」の成就である。
 - ②いのちのパンの説教は、「まこと」の啓示である。
- (2) イエスは、「比ゆ」を用いてご自身の本質を教えられた。
- (3) 「いのちのパン」の説教は、ユダヤ人たちにとっては難解であった。
- (4) イエスはその意味を詳細に解説された。

3. アウトライン:いのちのパンの説教(2)

- (1) イエスの宣言(6:41~51)
- (2) ユダヤ人たちの疑問(6:52~59)

4. 結論

- (1) 聖餐式との関係
- (2) 多様な比ゆのことば

いのちのパンの説教について学ぶ。

I. イエスの宣言(6:41~51)

1. 41~42節

Joh 6:41 ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から下って来たパンです」と言われたので、イエスについて小声で文句を言い始めた。

Joh 6:42 彼らは言った。「あれは、ヨセフの子イエスではないか。私たちは父親と母親を知っている。どうして今、『わたしは天から下って来た』と言ったりするのか。」

(1) ガリラヤのユダヤ人たちは、つぶやいた。

- ①荒野を旅するユダヤ人たちがつぶやいたように。
- ②「わたしは天から下って来たパンです」ということばを理解できない。
- ③その主張と彼らがイエスについて知っていることが、かけ離れている。
- ④彼らは、イエスがヨセフの子であることを知っていた。
- ⑤彼らは、ヨセフとマリアを知っていた。

2. 43~44節

Joh 6:43 イエスは彼らに答えられた。「自分たちの間で小声で文句を言うのはやめなさい。

Joh 6:44 わたしを遣わされた父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとに来ることはできません。わたしはその人を終わりの日によみがえらせます。

(1) 彼らは、イエスの主張とイエスの出自の間に矛盾があると感じていた。

①イエスは、彼らがつぶやいていることを見抜き、それを叱責された。

(2) イエスは、どういう人が救われるかを示された。

- ①イエスを信じる人とは、父なる神によって引き寄せられた人である。
- ②彼らは、イエスを信じた結果、より深い理解に至る。
- ③イエスは彼らを終わりの日によみがえらせる。
*携挙の時によみがえらせる。
- ④神の選びが先行するが、人間の責任がなくなるわけではない。
*神の主権と人間の自由意志は、ともに受け入れる必要がある。

3. 45節

Joh 6:45 預言者たちの書に、『彼らはみな、神によって教えられる』と書かれています。父から聞いて学んだ者はみな、わたしのもとに来ます。

(1) イエスを信じる者は、父なる神から聞いて学んだ者である。

- ①彼らは、イエスの本質について父なる神から学ぶ(聖書を通して)。
- ②この教えの根拠は、イザ54:13である。

Isa 54:13 あなたの子たちはみな、【主】によって教えられ、あなたの子たちには豊かな平安がある。

4. 46節

Joh 6:46 父を見た者はだれもいません。ただ神から出た者だけが、父を見たのです。

- (1) 神を啓示するのは、御子イエスだけである。
 - ①父を見た者はだれもない。
 - ②神が遣わしたイエスだけが神を見た。
 - ③人は、神と人の唯一の仲介者であるイエスから学ぶことによって父を知る。
 - ④聖書は、このことについて証言している。

5. 47~48節

Joh 6:47 まことに、まことに、あなたがたに言います。信じる者は永遠のいのちを持っています。

Joh 6:48 わたしはいのちのパンです。

- (1) ここでは、人間の責務が教えられている。
 - ①父なる神の選びが先行する。
 - ②人間の側の応答が要求される。

- (2) 「まことに、まことに」
 - ①厳粛な教えが語られる。
 - *業による救いではなく、信仰による救いが語られる。
 - ②「信じる者は永遠のいのちを持っています」
 - *「わたしを」ということばが省略されている。
 - ③信じるとは、神の選びに対する自然な応答である。
 - ④人は、信じた瞬間に永遠のいのちの実質を味わい始める。

- (3) 「わたしはいのちのパンです」
 - ①これまで語られてきた「いのちのパン」とは、イエスのことである。
 - ②イエスは「いのちを与えるパン」である。
 - ③イエスを信じるなら、永遠のいのちが与えられる。

6. 49~50節

Joh 6:49 あなたがたの先祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。

Joh 6:50 しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことはありません。

- (1) ユダヤ人たちは、マナと同じようなものを与えてほしいと要求した。
 - ①そこでイエスは、荒野で与えられたマナといのちのパンを対比させる。

(2) 対比

- ①先祖たちは荒野でマナを食べ、一時的な満足を得た。
*しかし、最後は死んだ。
- ②イエスは天から下って来たパンである。
*イエスを信じる者は永遠のいのちを得、死ぬことがない。

7. 51 節

Joh 6:51 わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。そして、わたしが与えるパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」

- (1) いのちのパンは、「天から下って来た生けるパン」である。
 - ①このパンを食べるなら（信じるなら）、永遠に生きる。
 - ②肉体的に死んでも、やがて復活し、天において永遠に生きる。
- (2) 父なる神がいのちのパンを与えた。
 - ①ここでは、いのちのパンであるイエスが、自らの肉を与える。
 - ②目的は、「世のいのちのため」である。
 - ③イエスは、十字架の死を指し示している。

II. ユダヤ人たちの疑問 (6:52~59)

1. 52 節

Joh 6:52 それで、ユダヤ人たちは、「この人は、どうやって自分の肉を、私たちに与えて食べさせることができるのか」と互いに激しい議論を始めた。

- (1) 彼らは、肉のレベルで考えているので、イエスのことばが理解できない。
 - ①「どうやって自分の肉を人に食べさせることができるか」
 - ②互いに激しい議論を始めた。

2. 53~54 節

Joh 6:53 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。」

Joh 6:54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」

- (1) 賢明な読者なら、イエスが比喩のことばを使っていることが分かる。
 - ①イエスの肉を食べ、イエスの血を飲むとは、イエスの人格を信じること。
 - ②聖餐式でパンとぶどう酒に与ることではない。
 - ③まず否定的に真理が語られる。
* イエスを信じなければ永遠のいのちを持っていない。

④次に肯定的に真理が語られる。

* イエスを信じる者は、永遠のいのちを持っている。

* イエスは終わりの日(携拳の時)にその人をよみがえらせる。

3. 55 節

Joh 6:55 わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物なのです。

(1) 「肉」と「血」は、イエスの人格の象徴である。

① イエスは、「まことの食べ物」であり「まことの飲み物」である。

② それゆえ、イエスは信じる者に永遠のいのちを与えることができる。

4. 56 節

Joh 6:56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。

(1) 信者とイエスの関係が比喩的に語られる。

① 飲食した肉や飲み物は体内にとどまり、その人の一部となる。

② イエスを信じた者は、イエスのうちにとどまる。

③ イエスもその人のうちにとどまる。

④ これ以上親密な関係はない。

5. 57 節

Joh 6:57 生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。

(1) 信者とイエスの関係が第2の比喩によって説明される。

① 父なる神は、イエスを地上に遣わした。

* 「生ける父」とは、「いのちの源である父」という意味である。

② 父なる神とイエスの間には、完全な調和と一致がある。

③ それと同じように、信者とイエスの間にも完全な調和と一致がある。

6. 58 節

Joh 6:58 これは天から下って来たパンです。先祖が食べて、なお死んだようなものではありません。このパンを食べる者は永遠に生きています。」

(1) これまでの教えの要約が語られる。

① イエスは、天から下って来たパンである。

② 先祖が食べて、なお死んだマナのようなものではない。

③ このパンを食べる者(信じる者)は永遠に生きる。

7. 59節

Joh 6:59 **これが、イエスがカペナウムで教えられたとき、会堂で話されたことである。**

(1) イエスが「いのちのパン」について教えたのは、カペナウムの会堂であった。

- ①カペナウムは、イエスの伝道の拠点であった。
- ②群衆は、イエスの後を追ってカペナウムまで来た。
- ③彼らは、会堂でイエスの教えを聞いた。

結論

1. 聖餐式との関係

(1) ヨハ6:50

Joh 6:50 **しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことはありません。**

- (2) 文字通りの解釈は、嫌悪感を催すものであり、どう考えてもあり得ない。
- (3) ある人たちは、これを聖餐式のことだと解釈する。
 - ①祈りによって、パンはイエスの肉に、ぶどう酒はイエスの血に変化する。
 - ②このパンとぶどう酒に与ることが、救いの条件である。
- (4) しかし、この解釈は業による救いを教えたもので聖書的ではない。
- (5) この聖句は、比喩的に解釈することが字義どおりの解釈となる。

2. 多様な比喩のことば

(1) ヨハ6:35

Joh 6:35 **イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。**

①「わたしのもとに来る」＝「わたしを信じる」

(2) ヨハ6:40

Joh 6:40 **わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持ち、わたしがその人を終わりの日によみがえらせることなのです。」**

①「子を見て」＝「信じる」

(3) ヨハ6:45

Joh 6:45 **預言者たちの書に、『彼らはみな、神によって教えられる』と書かれています。父から聞いて学んだ者はみな、わたしのもとに来ます。**

①「父から聞いて学んだ」＝「わたしのもとに来ます」

(4) ヨハ6:51

Joh 6:51 **わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。そして、わたしが与えるパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」**

①「食べる」＝「信じる」

ヨハネの福音書(17)

説教への応答

ヨハ6:60~7:9

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ① 公生涯への序曲(1:19~51)
 - ② 初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③ 最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④ サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - ⑥ 2度目のエルサレム訪問(5:1~47)
 - ⑦ 後期ガリラヤ伝道(6:1~7:9)
 - * 第4のしるし:5,000人の給食(6:1~15)
 - * 第5のしるし:水上歩行(6:16~21)
 - * いのちのパンの説教(6:22~59)
 - * 説教への応答(6:60~7:9)

2. 注目すべき点

- (1) 「恵みとまことはイエス・キリストによって実現した」(ヨハ1:17)
 - ① 5,000人の給食は、「恵み」の成就である。
 - ② いのちのパンの説教は、「まこと」の啓示である。
- (2) イエスは、「比ゆ」を用いてご自身の本質を教えられた。
- (3) 「いのちのパン」の説教に、多くの人たちがつまずいた。

3. アウトライン:説教への応答

- (1) 多くの弟子たちの応答(6:60~65)
- (2) 12弟子の応答(6:66~71)
- (3) ユダヤ人たちの応答(7:1~9)

4. 結論:イエスの時

説教への応答

I. 多くの弟子たちの応答(6:60~65)

1. 60節

Joh 6:60 これを聞いて、弟子たちのうちの多くの者が言った。「これはひどい話だ。だれが聞いていられるだろうか。」

(1) ユダヤ人たちは、イエスの教えに反発を覚えた(48~50節)。

Joh 6:48 わたしはいのちのパンです。

Joh 6:49 あなたがたの先祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。

Joh 6:50 しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことはありません。

- ①ユダヤ人たちだけでなく、弟子たちのうちの多くの者が反発した。
- ②この段階では、12弟子以外に多くの弟子たちがいた。

(2) 弟子の中には、信者と不信者が混在していた。

- ①不信者のグループは、ラビ・イエスに従うことを放棄した。
- ②本物の信者と偽の信者のふり分けが起こった。

2. 61~62

Joh 6:61 しかしイエスは、弟子たちがこの話について、小声で文句を言っているのを知って、彼らに言われた。「わたしの話があなただたをつまずかせるのか。」

Joh 6:62 それなら、人の子がかつていたところに上るのを見たら、どうなるのか。

(1) イエスは、小声で文句を言っている弟子たちに語られた。

- ①「天から下ったパン」の話につまずく者は、それ以上の啓示を理解できない。
- ②それ以上の啓示とは、人の子がかつていたところに上るということである。
*十字架の死、復活、昇天の預言である。
*メシアが十字架の死と遂げることは、ユダヤ人にとって忌むべきこと。

3. 63節

Joh 6:63 いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。

(1) イエスが語ってきたことは、肉的事実がらではなく、霊的真理である。

- ①イエスは、霊的真理を最も重視された。
- ②肉的事実がらにしか関心のない者たちには、霊的真理は理解できない。
- ③イエスのことばは、聖霊が与える霊的真理であり、いのちである。
- ④イエスのことばを信じる者は、永遠のいのちを得る。

4. 64節

Joh 6:64 けれども、あなたがたの中に信じない者たちがいます。」信じない者たちがだれか、ご自分を裏切る者がだれか、イエスは初めから知っておられたのである。

(1) イエスは、誰が信じない者で、誰が裏切り者であるかを、知っておられた。

- ①「初めから」とは、公生涯の初めからという意味であろう。
- ②それゆえ、裏切りに遭っても驚くことはない。

5. 65節

Joh 6:65 そしてイエスは言われた。「ですから、わたしはあなたがたに、『父が与えてくださらないかぎり、だれもわたしのもとに来ることはできない』と言ったのです。」

- (1) 信じていない者がいても、イエスの奉仕が失敗したわけではない。
 - ①信じるかどうかの背後には、父なる神の招きがある。
 - ②とは言え、人には信じるという責務がある。
 - ③それは、永遠の運命を決する責務である。
 - ④人は、信じることによって自分が神から選ばれていたことを確認する。

II. 12弟子の応答(6:66~71)

1. 66節

Joh 6:66 こういうわけで、弟子たちのうちの多くの者が離れ去り、もはやイエスとともに歩もうとはしなくなった。

- (1) 「いのちのパン」の話は、本物の信者と偽の信者を区別した。
 - ①イエスは、弟子の人数が減っても真理を語ることを躊躇しなかった。
 - *主のしもべたる者は、真理を語ることを恐れてはならない。
 - ②真理は、人を二分する。これは避けることのできない現実である。

2. 67節

Joh 6:67 それで、イエスは十二人に、「あなたがたも離れて行きたいのですか」と言われた。

- (1) 12弟子に対する質問は、大半の弟子たちが去ったことを示唆している。
 - ①この質問は、「NO」という回答を予期したものである。
 - ②イエスは、12弟子の信仰を知っておられた。
 - ③しかし、彼らが自らの信仰を確認する必要があることも知っておられた。

3. 68~69節

Joh 6:68 すると、シモン・ペテロが答えた。「主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。」

Joh 6:69 私たちは、あなたが神の聖者であると信じ、また知っています。」

- (1) ペテロが12弟子を代表して答えた。
 - ①イエスだけが唯一の希望である。
 - ②イエスだけが、永遠のいのちに至る教理を教えてくれる。

③イエスから離れることは、絶望を意味する。

(2) ペテロは、イエスが「神の聖者」であることを信じ、また知っている。

①信じ、知っているという順番が大切である。

②イエスは神から遣わされたメシアである。

③ピリポ・カイザリアでのペテロの信仰告白とは異なる(マタ16:16)。

*ここでは、イエスの神性を認めるところまでは至っていない。

4. 70節

Joh 6:70 イエスは彼らに答えられた。「わたしがあなたがた十二人を選んだのではありませんか。しかし、あなたがたのうちの一人は悪魔です。」

(1) 12弟子を選んだのはイエスである。

①12弟子がイエスを選んだわけではない。

(2) イエスは、12弟子の中に父が選ばなかった者が一人いることを知っていた。

①「悪魔です」とは、「悪魔のように振舞う」ということである。

5. 71節

Joh 6:71 イエスはイスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのであった。このユダは十二人の一人であったが、イエスを裏切ろうとしていた。

(1) この部分は、ヨハネによる解説である。

①悪魔のように振舞う者とは、イスカリオテのユダである。

②彼は、イエスを裏切ろうとしていた。

III. ユダヤ人たちの応答(7:1~9)

1. 1節

Joh 7:1 その後、イエスはガリラヤを巡り続けられた。ユダヤ人たちがイエスを殺そうとしていたので、ユダヤを巡ろうとはされなかったからである。

(1) この箇所は、ユダヤ人たち(イエスの兄弟たちも含む)の応答を記している。

①ユダヤ地方では、イエスに対する迫害が激しくなっていた

②イエスはユダヤに行かないで、ガリラヤで奉仕を続けた。

2. 2節

Joh 7:2 時に、仮庵の祭りというユダヤ人の祭りが近づいていた。

(1) 仮庵の祭りは、秋の巡礼祭である。

①過越の祭りから約半年後にやって来る。

- ②これは、荒野の放浪を記念する農業祭である。
- ③また、千年王国を予表する祭りでもある。
- ④この箇所は、「いのちのパン」の説教が語られて半年後のことである。

3. 3~5節

Joh 7:3 そこで、イエスの兄弟たちがイエスに言った。「ここを去ってユダヤに行きなさい。そうすれば、弟子たちもあなたがしている働きを見ることができます。」

Joh 7:4 自分で公の場に出ることを願いながら、隠れて事を行う人はいません。このようなことを行うのなら、自分を世に示しなさい。」

Joh 7:5 兄弟たちもイエスを信じていなかったのものである。

- (1) イエスの兄弟たちは、まだイエスを信じていなかった。
 - ①彼らは、エルサレムに上るようにイエスに提案した。
 - ②エルサレムでしるしを行えば、弟子の数は増えるだろう。
 - *今いる弟子たちも安心するだろう。
 - ③彼らは、弟子を増やすことが重要だと考えている。
 - ④しかし、イエスの目標は、十字架にかかって死ぬことである。
 - ⑤兄弟たちのことばには、皮肉が含まれていると思われる。

4. 6~7節

Joh 7:6 そこで、イエスは彼らに言われた。「わたしの時はまだ来ていません。しかし、あなたがたの時はいつでも用意ができています。」

Joh 7:7 世はあなたがたを憎むことができないが、わたしのことは憎んでいます。わたしが世について、その行いが悪いことを証ししているからです。」

- (1) イエスの使命は、父なる神のタイムテーブルに従って歩むことである。
 - ①この世はイエスを憎んでいる。
 - ②イエスの教えが、彼らの罪を暴くからである。
 - ③イエスがエルサレムに上る時は、まだ来ていない。
- (2) イエスの兄弟たちは、この世からは憎まれていない。
 - ①彼らには父なる神から与えられた使命はない。
 - ②それゆえ、好きな時にエルサレムに上ることができる。

5. 8~9節

Joh 7:8 あなたがたは祭りに上って行きなさい。わたしはこの祭りに上って行きません。わたしの時はまだ満ちていないのです。」

Joh 7:9 こう言って、イエスはガリラヤにとどまられた。

(1) イエスは、兄弟たちの提案を断った。

①イエスは、父なる神のタイムテーブルに従ったのである。

*「まだ満ちていないのです」

②イエスは、ガリラヤでの奉仕を継続された。

③その後、イエスはエルサレムに上られた(10節)。

結論：イエスの時

1. 父なる神のタイムテーブル

(1) 2:4

Joh 2:4 すると、イエスは母に言われた。「女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません。」

(2) 7:6

Joh 7:6 そこで、イエスは彼らに言われた。「わたしの時はまだ来ていません。しかし、あなたがたの時はいつでも用意ができています。」

(3) 7:8

Joh 7:8 あなたがたは祭りに上って行きなさい。わたしはこの祭りに上って行きません。わたしの時はまだ満ちていないのです。」

(4) 7:30

Joh 7:30 そこで人々はイエスを捕らえようとしたが、だれもイエスに手をかける者はいなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。

(5) 8:20

Joh 8:20 イエスは、宮で教えていたとき、献金箱の近くでこのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。

(6) 17:1

Joh 17:1 これらのことを話してから、イエスは目を天に向けて言われた。「父よ、時が来ました。子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。」

2. 適用

(1) 2025年という年

(2) 自分が置かれている状況

ヨハネの福音書(18)
仮庵の祭りでの教え(1)
ヨハ7:10~24

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ①公生涯への序曲(1:19~51)
 - ②初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - ⑥2度目のエルサレム訪問(5:1~47)
 - ⑦後期ガリラヤ伝道(6:1~7:9)
 - ⑧3度目のエルサレム訪問(7:10~10:42)
 - * 仮庵の祭りでの教え(7:10~44)

2. 注目すべき点

- (1) このセクションは、多くの重要な情報を含んでいる。
- (2) イエスの本質がより深く啓示されていく。
- (3) それと比例して、イエスへの敵意が激しくなっていく。

3. アウトライン: 仮庵の祭りでの教え

- (1) 祭りの雰囲気(7:10~13)
- (2) イエスの権威(7:14~24)
- (3) イエスの出自と本質(7:25~36)
- (4) 御霊の約束(7:37~44)

4. 結論: 7章17節

仮庵の祭りでの教えについて学ぶ。

I. 祭りの雰囲気(7:10~13)

1. 10節

Joh 7:10 しかし、兄弟たちが祭りに上って行った後で、イエスご自身も、表立ってではなく、いわば内密に上って行かれた。

- (1) イエスの兄弟たちは、仮庵の祭りを祝うためにエルサレムに上って行った。

①彼らは、父なる神のタイムテーブルとは無関係に行動することができた。

(2) イエスは、内密に上って行かれた。

「しかし、兄弟たちが祭りに上って行った後で、イエスご自身も、人目を避け、ひそかに上って行かれた」(共同訳)

①イエスは、敬虔なユダヤ人男子として巡礼祭に参加された。

②しかし、メシアとして公に姿を現すことは避けた。

③イエスは、父なる神のタイムテーブルに従って行動された。

2. 11節

Joh 7:11 ユダヤ人たちは祭りの場で、「あの人はどこにいるのか」と言って、イエスを捜していた。

(1) 「ユダヤ人たち」とは、ユダヤ人の指導者たちである。

①ヨハ1:19、7:13

②彼らはイエスを捜していたが、目的はイエスを逮捕し殺すためである。

3. 12~13節

Joh 7:12 群衆はイエスについて、小声でいろいろと話をしていた。ある人たちは「良い人だ」と言い、別の人たちは「違う。群衆を惑わしているのだ」と言っていた。

Joh 7:13 しかし、ユダヤ人たちを恐れたため、イエスについて公然と語る者はだれもいなかった。

(1) 群衆(ユダヤの住民と巡礼者)の間に、イエスの評価に関する論争があった。

①「良い人だ」(メシアだ)

②「違う。群衆を惑わしているのだ」(偽のメシアだ)

③イエスが「しるし」を行うと、人々は2分されていく。

(2) 群衆は、指導者たち(ユダヤ人たち)を恐れた。

①イエスはメシアだと公言すれば、逮捕される恐れがある。

*彼らは、会堂からの追放を恐れた(9:22参照)。

②以上の4節は、イエスの教えの背景を説明したものである。

II. イエスの権威(7:14~24)

1. 14節

Joh 7:14 祭りもすでに半ばになったころ、イエスは宮に上って教え始められた。

(1) 仮庵の祭りは、7日間(+1)の祭りである。

①祭りが半ばになったころ、イエスは宮に上って教え始めた(マラ3:1参照)。

*恐らくソロモンの廊であろう。ラビが民衆に教える場所である。

2. 15 節

Joh 7:15 ユダヤ人たちは驚いて言った。「この人は学んだこともないのに、どうして学問があるのか。」

(1) ユダヤ人たちは驚いた。

① イエスは、正式なラビ教育を受けたことがない。

② にもかかわらず、学問がある。

* 旧約聖書に精通している。

* 的確な適用を語ることができる。

* 誰にでも分かるように語ることができる。

3. 16 節

Joh 7:16 そこで、イエスは彼らに答えられた。「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた方のものです。」

(1) イエスは、父なる神に栄光を帰す。

① 自分の手柄にしない。

② イエスが語る事、教える事は、すべて父なる神が命じたものである。

(2) イエスの教えは、ラビ的ユダヤ教の教えとは異なる。

① ラビ的ユダヤ教の口伝律法が否定された。

4. 17 節

Joh 7:17 だれでも神のみこころを行おうとするなら、その人には、この教えが神から出たものなのか、わたしが自分から語っているのかが分かります。

(1) イエスの教えが真実なものであるかどうかを判断するのは、容易である。

① 神の御心を行いたいと心から願う。

* 単に真理を求めるだけでは不十分である。

② そうするなら、神はその人に真理を啓示される。

* 神はその人に信仰を与える。

* 信仰があると、イエスの教えが神から出たものであることが分かる。

5. 18 節

Joh 7:18 自分から語る人は自分の栄誉を求めます。しかし、自分を遣わされた方の栄誉を求める人は真実で、その人には不正がありません。

(1) 自分の考えを語る人は、結果的に自分の栄誉を求めることになる。

①それを意識している人と、意識していないが結果的にそうなる人がいる。

(2) イエスの場合は、それとは異なる。

①イエスは、自分を遣わされた方の栄誉を求める。

②それゆえ、イエスの教えは真実である。

③イエスには不正はないので、群衆を騙すことはあり得ない。

6. 19節

Joh 7:19 モーセはあなたがたに律法を与えたではありませんか。それなのに、あなたがたはだれも律法を守っていません。あなたがたは、なぜわたしを殺そうとするのですか。」

(1) イエスは、ユダヤ人たちを直接的に糾弾する。

①ユダヤ人たちは、モーセの律法が与えられていることを誇りとしていた。

②しかし、それを実行していなかった。

③それどころか、イエスを殺そうとしていた。

④無実の者を殺すのは、律法違反である(出20:13)。

7. 20節

Joh 7:20 群衆は答えた。「あなたは悪霊につかれている。だれがあなたを殺そうとしているのか。」

(1) 群衆は、ユダヤ人の指導者たちの殺意を理解していなかった。

①「あなたがたは、なぜわたしを殺そうとするのですか」に反発した。

②そして、「あなたは悪霊につかれている」と言った。

*「ベルゼブルの力によって悪霊どもを追い出している」(共観福音書)

*ヨハネの福音書では、「悪霊につかれている」である。

*当時は、パラノイアの原因は悪霊にあるとされていた。

8. 21節

Joh 7:21 イエスは彼らに答えられた。「わたしが一つのわざを行い、それで、あなたがたはみな驚いています。」

(1) 「一つのわざ」とは、ベテスダの池での癒やしである(5章)。

①この「しるし」を見た者たちは、みな驚いた。

②彼らは、父なる神に栄光を帰すような驚き方はしなかった。

③彼らの驚きは、イエスが安息日にこれを行ったことにあった。

(2) この癒しは、ユダヤ人の指導者たちを怒らせた。

①この日を起点に、彼らはイエスを殺そうとするようになった。

9. 22節

Joh 7:22 モーセはあなたがたに割礼を与えました。それはモーセからではなく、父祖たちから始まったことです。そして、あなたがたは安息日にも人に割礼を施しています。

- (1) ユダヤ人たちは、割礼を重視していた。
 - ①割礼は、アブラハム契約のしるしである。
 - ②割礼は、健康上の理由で与えられたものでもある。

- (2) 割礼は、父祖たちから始まった。
 - ①モーセよりも前のアブラハム、イサク、ヤコブの時代から始まった。
 - ②割礼は、モーセの律法の中にも採用された。
 - ③ユダヤ人たちは、安息日でも割礼を施していた。
*生まれて8日目に割礼を施す。

10. 23節

Joh 7:23 モーセの律法を破らないようにと、人は安息日にも割礼を受けるのに、わたしが安息日に人の全身を健やかにしたということで、あなたがたはわたしに腹を立てるのですか。

- (1) ユダヤ人たちは、安息日にも割礼を施していた。
 - ①モーセの律法を破らないためである。

- (2) 律法への従順が称賛されるなら、恵みのわざはさらに称賛されるべきである。
 - ①安息日に人の全身を健やかにするのは、称賛されるべきことである。

11. 24節

Joh 7:24 うわべで人をさばかないで、正しいさばきを行いなさい。」

- (1) ユダヤ人たちの問題点は、うわべで人を裁いていることである。
 - ①安息日に癒しを行うのは律法違反であると考えた。
 - ②安息日でも、恵みのわざを行うのは素晴らしいという点に気づかない。

結論：7章17節

Joh 7:17 だれでも神のみこころを行おうとするなら、その人には、この教えが神から出たものなのか、わたしが自分から語っているのかが分かります。

1. イエスの教えを信じるためのステップ

- (1) 単に真理を求めるだけでは不十分である。
- (2) 神の御心を行いたいと心から願うことが重要である。

(3) そうするなら、神はその人に真理を啓示される。

2. ユダヤ人たちはイエスの資格を問うたが、イエスは聴衆の資格を問うた。

(1) 知的分析ではなく、神への従順こそ重要である。

①御心を行いたいと心から願う。

②そうすると、信仰が与えられる。

③結果として、知識が増す。

(2) 以上のことは、求道者にとって励みとなり、力となる。

ヨハネの福音書(19)
仮庵の祭りでの教え(2)
ヨハ7:25~36

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ①公生涯への序曲(1:19~51)
 - ②初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - ⑥2度目のエルサレム訪問(5:1~47)
 - ⑦後期ガリラヤ伝道(6:1~7:9)
 - ⑧3度目のエルサレム訪問(7:10~10:42)
 - * 仮庵の祭りでの教え(7:10~44)

2. 注目すべき点

- (1) このセクションは、多くの重要な情報を含んでいる。
- (2) イエスの本質がより深く啓示されていく。
- (3) それと比例して、イエスへの敵意が激しくなっていく。

3. アウトライン：仮庵の祭りでの教え

- (1) 祭りの雰囲気(7:10~13)
- (2) イエスの権威(7:14~24)
- (3) イエスの出自と本質(7:25~36)
- (4) 御霊の約束(7:37~44)

4. 結論：イエスが教えた終末論

仮庵の祭りでの教えについて学ぶ。

III. イエスの出自と本質(7:25~36)

1. 25~26節

Joh 7:25 さて、エルサレムのある人たちは、こう言い始めた。「この人は、彼らが殺そうとしている人ではないか。」

Joh 7:26 見なさい。この人は公然と語っているのに、彼らはこの人に何も言わない。もしかしたら議員たちは、この人がキリストであると、本当に認めたのではないか。

(1) イエスの主張(前回の内容)

- ①自分は、父なる神から与えられた教えを語っている。
- ②自分には、安息日に癒しを行う権威がある。

(2) イエスが公然と語っているのを見て、人々は驚いた。

- ①巡礼者たちは、指導者たちがイエスを殺そうとしているのを知らなかった。
- ②しかし、エルサレムの住民たちは、それを知っていた。

(3) エルサレムのある人たちの疑問

- ①イエスは公然と、大胆に、人々に教えている。
- ②にもかかわらず、指導者たち(議員たち)は、この人を放置している。
*指導者たちは、群衆の反発を恐れて、沈黙していた。
- ③この人がメシアであると、本当に認めたのではないか。

2. 27節

Joh 7:27 しかし、私たちはこの人がどこから来たのか知っている。キリストが来られるときには、どこから来るのかだれも知らないはずだ。」

(1) 当時のユダヤ人たちは、旧約聖書に関して無知であった。

- ①ユダヤ教の伝承では、メシアは突然、神秘的な方法で来られるとされていた。
- ②彼らは、メシアはベツレヘムで誕生することを知らなかった(ミカ5:2)。
- ③また、メシアは赤子から成長し、成人になることを知らなかった。

(2) 旧約聖書に関する無知は、間違った結論を生む。

- ①彼らは、イエスがどこから来たかを知っていた。
- ②イエスはナザレ出身で、母はマリア、父はヨセフである。
- ③彼らは、イエスがナザレで誕生したと思い込んでいた。
- ④以上の情報を基に、イエスはメシアではないと結論づけた。

3. 28~29節

Joh 7:28 イエスは宮で教えていたとき、大きな声で言われた。「あなたがたはわたしを知っており、わたしがどこから来たかも知っています。しかし、わたしは自分で来たのではありません。わたしを遣わされた方は真実です。その方を、あなたがたは知りません。

Joh 7:29 わたしはその方を知っています。なぜなら、わたしはその方から出たのであり、その方がわたしを遣わされたからです。」

- (1) イエスは、信じない人々に大声で言われた。
 - ①大声で言うのは、それが重要な真理だからである。

- (2) イエスのことばには、アイロニー(皮肉)が含まれている。
 - ①確かに彼らは、イエスの地上的な出自を知っていた。
 - *彼らは、イエスのことを「ナザレのイエス」として知っていた。
 - *しかしこれは、イエスに関する表面的な理解である。
 - *しかも、イエスがベツレヘムで誕生したという情報が欠落している。
 - ②彼らは、イエスの天的な出自を知らなかった。
 - *イエスは、自分の権威に基づいて活動しているのではない。
 - *イエスは、父なる神によって遣わされたメシアである。
 - ③ここには、イエスの神性宣言がある。
 - *イエスは、父なる神と同じように神である。
 - *イエスは、父なる神を知っている。
 - *しかし、イエスを信じない人々は、父なる神を知らない。
 - *それゆえ、父なる神が遣わしたイエスを信じない。

4. 30~31節

Joh 7:30 そこで人々はイエスを捕らえようとしたが、だれもイエスに手をかける者はいなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。

Joh 7:31 群衆のうちにはイエスを信じる人が多くいて、「キリストが来られるとき、この方がなされたよりも多くのしるしを行うだろうか」と言い合った。

- (1) 人々は、イエスの大胆な宣言の内容を理解した。
 - ①イエスのことばは、冒とく罪に当たる。
 - ②逮捕して、石打の刑に処すべきである。
 - ③しかし、だれもイエスに手をかける者はいなかった。
 - ④神がイエスを守られたのである。
 - *イエスが十字架に付く時はまだ来ていなかった。
 - *仮庵の祭りでイエスが死ぬことはあり得ないことである。

- (2) 群衆のうちにはイエスを信じる者も多く出た。
 - ①彼らは、イエスが行うしるしを見て、イエスはメシアだと信じた。
 - *イエスは人々を二分する。
 - ②イエス以外にメシアが来たとしても、これ以上のしるしを行うことはない。
 - *信じるのはよいことであるが、この信仰は不十分である。
 - *イエスが受難のしもべであることをまだ理解していない。

5. 32節

Joh 7:32 パリサイ人たちは、群衆がイエスについて、このようなことを小声で話しているのを耳にした。それで祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスを捕らえようとして下役たちを遣わした。

(1) パリサイ人たちの不安

- ①群衆が小声でイエスを称賛しているのを聞いた。
- ②イエスの人気が高まるのを恐れた。
 - *自分たちの教えに耳を傾ける者がいなくなる。
- ③イエスを捕えようとして下役たちを遣わした。
 - *サドカイ人たちと協力して、サンヘドリンの許可を得たのであろう。
 - *下役とは、神殿警察(レビ人)である。サンヘドリンに報告義務がある。

6. 33~34節

Joh 7:33 そこで、イエスは言われた。「もう少しの間、わたしはあなたがたとともにいて、それから、わたしを遣わされた方のもとに行きます。

Joh 7:34 あなたがたはわたしを捜しますが、見つけることはありません。わたしがいるところに来ることはできません。」

(1) イエスは、下役たちに語られた。

- ①それは、パリサイ人たちと民衆に向けたものでもあった。
- #### (2) イエスは謎めいた方法で、終末論を語られた。
- ①イエスに与えられている地上での奉仕の時間は、残り少なくなっている。
 - ②やがてイエスは、父なる神のもとに行かれる。
 - ③そのときになってイエスを捜しても、見つけることはない。
 - *不信仰な者は、イエスがいるところ(天)に来ることができない。

7. 35~36節

Joh 7:35 すると、ユダヤ人たちは互いに言った。「私たちには見つからないとは、あの人はどこへ行くつもりなのか。まさか、ギリシア人の中に離散している人々のところに行って、ギリシア人を教えるつもりではあるまい。

Joh 7:36 『あなたがたはわたしを捜しますが、見つけることはありません。わたしがいるところに来ることはできません』とあの人が言ったこのことばは、どういう意味だろうか。」

(1) ユダヤ人たちは、霊的盲目状態にあった。

- ①信じたくなかったので、信じるができなかった。

(2) 彼らの疑問

- ① 私たちには見つからないとは、あの人はどこに行くつもりなのか。
- ② ギリシア人の中に離散しているユダヤ人のところに行って教えるのか。
- ③ さらに、ギリシア人にも教えるのか。
- ④ 「あなたがたはわたしを捜しますが、見つけることはありません」とは、どういう意味なのか。
- ⑤ 「わたしがいるところに来ることはできません」とは、どういう意味なのか。

結論：イエスが教えた終末論

1. 7:33~34

Joh 7:33 そこで、イエスは言われた。「もう少しの間、わたしはあなたがたとともにいて、それから、わたしを遣わされた方のもとに行きます。

Joh 7:34 あなたがたはわたしを捜しますが、見つけることはありません。わたしがいるところに来ることはできません。」

2. 残されている時間は少ない。

- (1) イエスの視点からすると、十字架の時は迫っている。
- (2) ユダヤ人の視点からすると、イエスを信じるための時間は短くなっている。

3. イエスは父なる神のもとに行く。

- (1) これは、十字架の死、復活、昇天の預言である。
- (2) このことばは、パリサイ人たちをさらに怒らせた。

4. ユダヤ人たちは、イエスを捜すが、見つけることはない。

- (1) この状態は、イエス時代から今に至るまで続いている。
- (2) 今でも、大半のユダヤ人たちがイエスを拒否している。
- (3) 彼らがイエスを見出すのは、患難期の最後の時である。
- (4) 彼らの祈りに応えて、イエスは再臨される(ゼカ12:10~13、黙1:7)。

5. ユダヤ人たちは、イエスがいるところに来ることができない。

- (1) イエスがいるところ(天)に来るための条件は、新生である。

6. イエスの教えから教訓を学ぶことができる。

- (1) 与えられた機会を生かす人は、幸いである。
- (2) 「きょう」という機会を逃すなら、2度と機会が来ない可能性もある。

ヨハネの福音書(20)
仮庵の祭りでの教え(3)
ヨハ7:37~44

1. 文脈の確認

- (1) 前書き(1:1~18)
- (2) イエスの公生涯(1:19~12:50)
 - ①公生涯への序曲(1:19~51)
 - ②初期ガリラヤ伝道(2:1~12)
 - ③最初のエルサレム訪問(2:13~3:36)
 - ④サマリア伝道(4:1~42)
 - ⑤ガリラヤ伝道の再開(4:43~54)
 - ⑥2度目のエルサレム訪問(5:1~47)
 - ⑦後期ガリラヤ伝道(6:1~7:9)
 - ⑧3度目のエルサレム訪問(7:10~10:42)
 - * 仮庵の祭りでの教え(7:10~44)

2. 注目すべき点

- (1) イエスの本質がより深く啓示されていく。
- (2) それと比例して、イエスへの敵意が激しくなっていく。
- (3) イエスは、父なる神のもとに行くと言った後、御霊の約束を与える。
 - ①より詳細な内容は、14~16章で啓示される。

3. アウトライン: 仮庵の祭りでの教え

- (1) 祭りの雰囲気(7:10~13)
- (2) イエスの権威(7:14~24)
- (3) イエスの出自と本質(7:25~36)
- (4) 御霊の約束(7:37~44)

4. 結論

- (1) 仮庵の祭りの意義
- (2) イエスの宣言の意義

仮庵の祭りでの教えについて学ぶ。

IV. 御霊の約束(7:37~44)

1. 37節a

Joh 7:37a さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立ち上がり、大きな声で言われた。

(1) 「祭りの終わりの大いなる日」

- ① 仮庵の祭りは、7日間続く(申16:13)。
- ② 8日目は、「聖なる会合の日」、「安息の日」である(レビ23:36)。
- ③ 「祭りの終わりの大いなる日」とは、祭りの8日目のことであろう。
(仮庵を建てている様子を写真で表示)

(2) 仮庵の祭りの期間、水汲みの儀式が行われた。

① 第二神殿時代に始まったもので、イエス時代にはこの習慣は確立していた。
(エルサレムの地図を表示)

② 儀式の概要(ミシュナの規定)

* 祭司が、シロアムの池まで行き、金の水差しで水を汲む。

- ・シロアムの池は、エルサレムの南端にある池である。
- ・ギホンの泉からシロアムの池に水が流れ込む。

* 金の水差しの容量は、300ml~350ml(片手で持てるサイズ)。

* 大祭司の率いる行列がシロアムの池から神殿に向かう。

- ・標高差60m、移動時間約30分

* その途中、聖歌隊がイザ12:3を歌った。

「あなたがたは喜びながら水を汲む。救いの泉から」(イザ12:3)

- ・「マイム・マイム」は、1900年代に作曲された曲である。
- ・歌詞は、イザ12:3がそのまま採用された。

* 仮庵の祭りは喜びの祭りであり、喜びのピークがこの儀式である。

* 人々は、木の枝を振った。

(木の枝を振っている写真)

- ・ルラヴ(Lulav) — ナツメヤシの葉 — 神に向かう心
- ・ハダス(Hadas) — ミルトスの枝 — 行動の清さ
- ・アラヴァ(Aravah) — ヤナギの枝 — 謙遜
- ・エトログ(Etrog) — 柑橘類の実(シトロン) — 人徳

* 神殿に着くと、祭壇の周りを1度回り、用意された銀の器に水を注ぐ。

* 銀の器の容量は1ヒン(4l~6l)で、注ぎ口が付いていたと思われる。

* 朝のささげ物の時間に、銀の器から水を注ぎ、祭壇の土台を潤す。

* もう一つの銀の器にぶどう酒を入れ、水と同時に祭壇の土台に注ぐ。

- ・金と銀の器を用いるのは、この儀式が聖なるものだからである。

* 7日目には祭壇の周りを7度回り、祭壇に水を注ぐ。

* この日から、雨のために祈り始める。

- ・乾季から雨季に移行する時期である。

- ・ 仮庵の祭りのテーマは、水である。
- ・ 水の重要性は、イスラエルを訪問したときに理解した。

(3) 8日目に立ち上がって大声で叫ぶ理由

- ① 8日目には、水汲みの儀式はない。
- ② 雨のために祈り始めた日に、イエスは「生ける水」の約束を語った。
- ③ 立ち上がって教えるのは、通常のラビの姿勢ではない。
- ④ 大声で叫ぶのは、その内容が重要だからである。

2. 37b~38節

Joh 7:37b 「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。」

Joh 7:38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」

(1) 「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい」

- ① この渴きは、靈的渴きである。
- ② イエスは、すべての人を招かれた。
- ③ 「わたしのもとに来て飲みなさい」とは、信じなさいという招きである。
* 「食べる」と「飲む」は、ともに比喩のことばである。

(2) 「その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」

- ① 「rivers of living water」
- ② イエスは、どの聖書箇所かは語っていない。
* 詩78:15~16、ゼカ14:8などが考えられる。
- ③ 「生ける水」の源は、イエスである。
- ④ イエスを信じる者は、溢れるほどの靈的満たしを経験する。
- ⑤ 「心の奥底」(腹)とは、人格の中心である。
- ⑥ 信者は、スポンジではなく、泉となる。

2. 39節

Joh 7:39 イエスは、ご自分を信じる者が受けることになる御霊について、こう言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ下っていなかったのである。

(1) ヨハネによる解説

- ① ここでは、「生ける水の川」は聖霊のことである。
- ② 教会時代の信者は、聖霊のバプテスマ、証印、内住を経験する。

(2) 「栄光を受けておられなかった」

- ①「栄光を受ける」とは、十字架、復活、昇天のことである。
- ②昇天したイエスは父なる神の右の座に着座し、聖霊を信者の上に注がれる。
- ③五旬節の祭りで、この約束が成就した(使2章)。
- ④この日は、教会の誕生日となった。

3. 40~42節

Joh 7:40 このことばを聞いて、群衆の中には、「この方は、確かにあの預言者だ」と言う人たちがいた。

Joh 7:41 別の人たちは「この方はキリストだ」と言った。しかし、このように言う人たちもいた。「キリストはガリラヤから出るだろうか。

Joh 7:42 キリストはダビデの子孫から、ダビデがいた村、ベツレヘムから出ると、聖書は言っているではないか。」

(1) イエスの評価に関して、分裂が起こった。

- ①「確かにあの預言者だ」という者がいた。
 - *モーセのような預言者(申18:15)
- ②「キリスト(メシア)だ」という者もいた。
 - *あの預言者とキリストは、別の人物だと考えられていた。
- ③「キリストはガリラヤから出るだろうか」という者もいた。
 - *彼らは、イエスはガリラヤ出身なのでキリストではないと考えた。
 - *彼らは、キリストはダビデの子孫で、ベツレヘムで誕生すると知っていた。
 - *しかし、イエスがベツレヘムで誕生したことは知らなかった。

4. 43~44節

Joh 7:43 こうして、イエスのことで群衆の間に分裂が生じた。

Joh 7:44 彼らの中にはイエスを捕らえたいと思う人たちもいたが、だれもイエスに手をかける者はいなかった。

(1) 「イエスのことで群衆の間に分裂が生じた」

- ①この状況は、今も変わらない。
- ②イエスをどう考えるかで、人類は2分される。
- ③信者は、イエスが神の子(神性と人性を持つ)であることを知っている。

(2) 「だれもイエスに手をかける者はいなかった」

- ①父なる神の許しがない。
- ②つまり、イエスの時がまだ来ていないということである。
- ③神の御心の中を歩む人は、その働きが完成するまでは、守られる。

結論

1. 仮庵の祭りの意義

(1) 仮庵の祭りは、荒野の放浪を記念する祭りである。

①水汲みの儀式は、岩から水が出たことを記念している。

②神は、荒野で水を供給された。

(2) 仮庵の祭りは、メシア的王国(千年王国)を予表する祭りである。

①神は、メシア的王国において、満たしと清めを提供される。

②ゼカ14:1~21が朗読される。

Zec 14:8 その日には、／エルサレムからいのちの水が流れ出る。／その半分は東の海に、／残りの半分は西の海に向かい、／夏にも冬にも、それは流れる。

③エゼ47:1~23が朗読される。

Eze 47:1 彼は私を神殿の入り口に連れ戻した。見ると、水が神殿の敷居の下から東の方へと流れ出ている。神殿が東に向いていたからである。その水は祭壇の南、神殿の右側の下から流れていた。

(3) 荒野での水の供給と約束の地での雨は、千年王国における祝福の先駆け。

①水は、聖霊が与えるいのちを象徴している。

②ぶどう酒は、聖霊が与える喜びを象徴している。

*カナの婚礼での奇跡

2. イエスの宣言の意義

(1) イエスは、自分こそメシア的王国の祝福をもたらす者であると主張した。

①水汲みの儀式のない8日目に、この宣言をした。

(2) 「だれでも渴いているなら、わたしのもつて来て飲みなさい」

①これこそ福音である。

②生きておられるイエスを信じるなら、聖霊が与えられる。

*聖霊のバプテスマ、証印、内住

③聖霊の約束の完全な成就是、メシア的王国において実現する。